

真由子先生に捧ぐ

H26年度作品

義人

国際ギデオン協会

新約聖書

ヨハネの第一の手紙

第 3 章

わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたちは、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。

2 愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。その御姿（みすがた）を見るからである

3 彼についてこの望みをいただいている者は皆、彼がきよくあらわれるように、自らをきよくする。

4 すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。

5 あなたがたが知っているとおりに、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんら罪がない。

6 すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である。

7 子たちよ。だれにも惑わされてはならない。彼が義人であると同様に、義を行う者は義人である。

真由子先生へ

長い間、迷っていた。これまでの書簡を公開するか。

心の病をもつ人に貢献できる。まあ幾らかに一人はいるかもしれない。

自己顕示欲が少ないといっはいるが、私の本心はより多くの人に共感、理解して頂きたいというところにあるだろう。

私は闘争心が旺盛なようだ。偏見をもち狭量な価値観でもって人を裁いていく、そういうものたちが敵だと明らかになってきた。不正と戦わなければ力が湧いてこないのだ。またしても世間が相手だ。

聖書に頑迷な人々の義に自らの義がまさっていなければ天国には入れないとでてきた。つまり世に問えと。これから私は堂々とどんな戦術、戦略を使っても我が義を訴えていこうと思う。決断した。

ずっともやもやしていた。受け身でネガティブにものごとをとらえることをどこかで支持していた。

釈迦はサトツタとき悪魔から「もうなすことはなしたのだから涅槃に入られたら」と怪しげに誘われた。たしかにある種頂きに一人立った釈迦には一抹の寂寥感に似たものが横切ったであろう。仏陀となった自分の境地。「きっとわずかなものでも心の清らかなるものなら教えを理解しその境涯に達するものはいるでしょう」梵天は布教されることを勧請した。バリ雑言を浴びてもいい。無視されても、言論の自由を追求して評価を恐れず、傷つくことは辛いけど、先生たちもいろんな厳しい目や言葉にさらされる中、治療を行っておられるのだからね。

インセンテブ云々よりもやると決めたらやるしかない。釈尊が伝導の旅にでられるのを決心されたように。聖書には私に義があると記されてある。ならば説かねばなるまい、全世界に向けて福音を述べよ、そう聖書は促す。

執着から離れ、欲望を制御し、悪心を除き、真実の愛と自由を心に描くことを勧め、満身にあふれる幸福をたくさんのひとと享受するため、神、仏の命ずる道を湛進する覚悟でございます。たとえ十字架にかけられても。

イエス、日蓮のみちからは逃れられないようだ

これは「魂の革命」である。

真由子先生へ

アメリカに存在する安宿のどこか忘れたけど、祝福のうたと記されてあったものを紹介させて下さい

強くなりたくて、力を求めたのに、優しくなれるように弱さを授かった

幸福になろうとして富を求めたのに、賢くなるようにと貧困を授かった

求めたものはひとつとしてこの手に入らなかったけど心の奥の本当の願いに目を覚ました

みんなにほめられたくて成功を求めたのに悲しみがわかるように失敗を授かった

人生を楽しもうとあれこれ求めていたのにすべてを喜ぶように心を授かった

言葉にならない思いの中で確かに感じられたこと

私はあらゆる人の中で祝福されていた

求めたものは、ひとつとして、この手に入らなかったけど心の願いに気づいたとき

祝福されていた

言葉にならない思いの中で確かに感じられたこと

私は、あらゆる人の中で祝福されていた

いい詩なのだけど共感してくれる人は
少ないだろうなと思っている自分が切ない

真由子先生へ

コンビニ、ゲームセンターのころ

不安が妄想を呼び恐怖感を生じさせる。なんの実体もないのに、柳の下の幽霊を見るように、私は脅える。格好が悪くて特に女の人には恥ずかしくて言えたもんじゃない。法座（R会の修行）でなんか話すこともできない。世の中を楽しく生きている人もいる。小さな命とともに心を慰めながら生きている人もいる。何故私はそう生きられないのか。病気のせい、過剰な薬物の摂取のせい、どっちのせい、分からない。こんな暮らしは、もういやだ。たまらない。衰弱が消えない。恐怖を忘れなければいけない。お役（行事）をすれば少し気が晴れる。

仏様の力のおかげであろうか。しかし薬を飲まなければ、頭のなかの脳の前の部分が萎縮するような気がする。特に仕事で、早番のときは酷い。なにか大事件が起こりそうな気がしてくる。暴言をはかれたり、難癖をつけられたり、收拾つかなくなり自分がパニックを起こすんじゃないかと思うと怖くなる。要は傷つくのが怖いのだ。

いいじゃないか惨めでも背伸びをせずに、自分らしくいきでゆけばと、自分を励ましてみる。後悔をせず。かつておこなった選択は間違っていなかった。そう思うようにする。それでいいんだ。完璧を目的し外れると、不安になり、人の視線が気になる。人に完全を求めるから、自分の不完全さが気になるのである。

「おとな」になるということは、人間は完全でないを知り、自他共に欠点のあることを、いやというほど目にし、思い知らされ、そこで孤独を味合うということにある。この孤独に耐え慣れることが「おとな」への試練である。適度に厳格で、適度に寛容に生きる方がよい、と思ったとき、立派なおとなである。

悪口の中にはとても大事な事実がある。いってもらえる事に感謝しよう。

自灯明、法灯明——法に縛られず自分を甘やかさず。

前段の様相は、自らの卑屈さにあるのと、刹那的な若者たちが毎夜お披露目してくれるマージャンゲームの様態に抵抗感があったのが、理由であろう。機械が故障すれば〔中止〕とマジックで書いた紙を貼り、しかたがないねえととぼけていた。気位がたかくてズボラでいい加減で正義感が強かった、自分はどんな職業があっているか。母親からの金銭の要求があった。薬のせいか勤務中はほとんど口をあけて寝ていた。しっかりイビキをかいて真夜中たった一人、いいつけるやつもない。極楽だった。

コンビニから逃げたのも管理者と小羊たち、経営者と従業員、統治者と被征服者、この関係は辛いものがあったからだ。社会規範のなっていないものを使わざるを得ないことがあり所持金を盗まれたり、売りものを多量に窃盗されたりしたのち業務の運営上、妹の経営方針と反目し自分は去ることにしたのです

若い者に好感をもてずにいた。朝から毎日作業着をきてマージャンゲームに浸るやつがいた。なにものか、いい身分だな、社員のやつに尋ねると「うちがもうから、かんけいない」とかえってきた。一日そこにいて、夕方、嫁とみられる女が3入の子をつれて側に立つのである。

その時自由という言葉思い出した

今、振り返ってみて（2014年3月現在）社会規範というのは自由の反語になるのだろうか。自由っていったいなにか考えていた。やはりそれは確かな主体性と心の自由、つまり想像力にあり、行動の礎になるのは勇気だとおもう。それは意味もなく法律を無視し、また常識を覆すのではなくその根底には深い思いやり、愛が流れていることが大事だと思う。聖書にもこまごました律法を守るより信仰によって義とされるとある。そういう人には神の国は近いのである。

職務経歴書 (先生少しお目を拝借させていただきます)

平成22年7月

1 希望職種 介護

2 志望動機及び職務経歴

利用者さんのありがたい言葉が聞きたくて御社で働きたく応募しました。

大学卒業後、プラスチック材料の商社に勤務、1年間の短い間でしたが、社会常識を叩き込まれ本当に良い経験となりました。

その後4年弱、老人病院の医療事務として働きました。病棟での勤務で指示のもと看護サービスのオーダーの作成、薬の手配、カルテへの記入、利用者の使用する自費の請求書の作成などに従事しました。ミスの許されない中、自己管理とコントロールに努め堅実さが増したと思います。

そんな中、母が犬の散歩の途中足にケガをしてしまいそれを機に家業の酒小売業を継ぐことに。そして折からの規制緩和により安売りや免許の有名無実化を迎えるにあたりコンビニエンスストアに転身することを余儀なくされました。

調子良く、順調に当初の借金も返すことができ7年経ちました。時代は他の店舗数が増えてき、駐車場の狭いうちのような店は不利になってきました。

案の定、売上げが落ちてゆき、私は店を母と妹に任せ、長年夜間勤務をした経験から24時間営業のドライブインとゲームセンターが一緒になっている店に働きにでることになりました。

長年の接客業でコミュニケーション能力もだいぶ開発されてきたなと思っていた7年目、今年の3月突然、警察の方から深夜営業は違法であるとお達しがあり私は解雇されたのです。

私は再就職には資格が最重要だと思い、市のヘルパー講座に通い始めました。そして7月16日に無事修了式を迎えました。以前より福祉の世界には意欲があり是非今度は事務と違う直接的な介護の現場を肌で感じたいと思っていました。そして御社の求人を見、自分にとって大きなチャンスだと思いました。なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

3 自己PR

人生は山あり谷あり良いことばかりも続くこともなく悪いことも続くこともないです。いつもピンチのあとにはチャンスに恵まれてきました。だから敢えてマイナスのことも書きました。

特に介護を受ける利用者さん達は人生の達人です。受容、共感していくには介護する本人の辛い苦しい思い出はなにものにも変えがたい財産になっていくのではないのでしょうか。そこから生まれる深い思いやりこそ介護する心の基本にならなくてはならないと思います。

私は15年前からR会という団体の信仰者にならせて頂いております。法華經の精神に基づいて生きていこうという教えです。それはまず人様のことを考えようということです。これは自己中心的になりがちな自分を戒めています。自分が変わることの大切さも示唆しています。すべては仏様が必要あって表して下さる現象であって無駄なものはないと言われる。振り返って本当にそうだなと思います。

アームズダウンという軍事費削減、貧困撲滅を訴えた運動における署名活動、ユニセフ街頭募金、などのボランティア活動に携わらせていただきました。布施の心を持ち弱い立場の人を思いやる、そんな経験を生かして貴社の介護業務に寄与させて頂ければこの上無い喜びであります。

先生クソの書いたものでしょう。上から目線の。いかに自分が立派かといかないやなやつだれも採りたくないですよ。でも今日職安では就活のためとしようしてこんな馬鹿なことを進めているのですよ。自己PR糞食らへ。強くて、自立していてその上、優しいどんな奴だろうな。人は皆傷ついているのだ。そこから発信しないと。

最強のふたりという映画では下半身がなんにも感じなくなった金持ちが、ヘルパーを募集します。いろいろ経歴を各自述べるのですが、そんな中ひとりの黒人がえらばれます。彼は「断ってくれ、失業手当がもらえる」といいはなち、また採用された理由は彼だけが同じ目線にたっていたというものであった。つまり差別していなかった。同悲同苦

私は利用者より経営者に媚びていたのです。

いままで私が稚拙な文を、奏上したのはただひとえに自分の心中の感じるままつれづれに表したものを、ご厚情をもってご高覧して頂きそして甘えさせて頂きたいばかりのことでした。決して譲歩、迎合、強制、啓蒙を迫ったものではなく不快な思いをされたのなら、お詫びします。ただ根底にあるのはあなた様への一途な想い、愛からであることをどうかご理解下さい

笑ってもかまいません。愛や夢に想いを馳せられるとき、先生の心の片隅にでも小さくメモして頂きたいというのが精一杯の男心なのです。いつもの外れで不器用ですけどそうやってここまでいきまいました。愚痴ですね。でも本当に感謝しております。いつもお忙しいなかご熟読くださってありがとうございます。時節が寒くなります。先生もご自愛くださいますよう衷心よりお祈り申し上げます。

真由子先生へ

私はかつて大きな間違いをしたことがある。宗教団体のR会の活動を積極的に行っていたときのことである。ある少年が学校もいかず自分の部屋でエレキギターばかりならしている。

なんとかしてくれ。親の切実な願い、父親は婿養子で誰にたいしてもあまり言葉を発しなかった。自分の意見がないのか、煮え切らない人にみえた。私は当時の自分自身にも叱咤するつもりで少年にバンドでも組んで夢を追いかけたらどうだろうと語りかけていた。彼は手を止め、強張った表情をして黙っていた。

私は成果をあげて自慢したい気持ちでいっぱいだった。彼の胸中などどうでもよかったのである。とりあえず役目を果たすのと、自分より駄目な人間を観察すること、このふたつで自己満足を感じられれば、十分だったのである。最低の偽善者だった。

今思うと彼はただギターがひきたかっただけなのである。ロックで飯を食いたいなどとは思ってもみないことだったのであろう。世間は目的を持ってという、勝ち抜けという。なぜひとり楽しくギターをかなでてはいけないのだろう。彼は生存競争を夢にすり替える、仕組まれたからくりを見抜いたのであろう。それこそ真のメッセンジャーである。アンガージュマンだけが人間の生き方ではあるまい。

そんななかで彼は人を愛することと生きる為にすることの区別を迷っていたのであろう。彼は19で父親になり工場で働きだした。彼の汗は愛に費やされ温かい暮らしを見つけ小さい祝福をあげた。愛するものは彼だけを頼り。オンボロのギターはどうなったのだろう。自分を傷つけたあの頃より幸せになっていることを私は信じたいのである。

真由子先生へ

父親のハナシをします。早くに兄を失いました。戦時中肺を患ったそうです。父は枕元でハーモニカを吹いていたそうです。そんなとき学級で盗難が発生しました。父は無実であるのに自分がやったと名乗りをあげました。本当にいいかつこしいだったんですよ。ある呉服屋の独身を通したおぼちゃんのハナシです。盗みの疑いがかけられた少女、犯人という言葉は酷かもしれませんが発覚します。馬乗りになって涙を流しとちめたそうです。おなじ年、生まれ、ふたりの人生は正反対の方角へと向かいました。彼女は数億円の財産を築きましたが友人にナスを盗まれたと大騒ぎし、また誰かが富を狙ってくるのではと疑心暗鬼になり父親、甥を拒絶し、(まあ火のない所には煙はたたないが)今すこし認知症が入っている。私の父は時代の世相もあって若いころは渡り鳥シリーズの小林旭みたいのに憧れてすこし見栄張りでキザな生き方がしたかったのでしょう。しかしそれは危険と背中合わせで非現実的なものでした。ビール瓶で頭を殴られたり、美食し、強い酒を毎晩のんだり、お坊っちゃんだったんですね。朋友二人と東京へ家出したりして、ひとりは帰省し化学工場を地道に勤めあげました。父が39歳で逝ったとき葬式にもこなかったが、彼は自宅の私の同級生の娘のまえで号泣していたそう。もうひとりの安さんはいつのまにかまいもどり身内もなく母親が亡くなると孤独死したそう。一度お歳暮だと、当時高かったバナナをひとりもってきてくれたことが父の生前にありました。父は本当に嬉しそうだった。家を捨てたものの生来世間知らずで優しい父、意地を通すわけにもいかず帰宅することになります。だがこんどは出始めの入浴剤のセールスで全国を旅することになる。そして九州で倒れたのであります。まだ23、4であったろう。母はそれを知らずに見合いで結婚する。父28母27でありました。母は初夜で私を身ごもります(聖霊ガブリエルのみわざによって)数日後、父はてんかんの発作を、おこし母をおどろかす。脳動脈瘤の手術は成功したのであろうか。血管をクリップで止めてある。静かに暮らせば大丈夫だろう。母のお腹には妹がいました。父は不安であったろう。自分の無責任さをつきつけられ、また年老いた両親の行く末。父は母の強さと慈悲深いところを愛しました。父は飲みに回りました。みんなに酒を振る舞ったのです。近所に不良少年がいれば親身になって話を聞きました。そんなことが、いや彼流の愛が自分の死んだあとの家族の生活を支えるところどこかで信じていました。義理、人情というやつでありましょうか。誰かが得をすれば誰かが損をするそんな世間、自分のこと、家族のことしか考えなくなっていく。それを当たり前のように淡々としている母の表情がカンにさわった。母は無神経なところもあった。だがたくましかった。家は酒小売業が本業だ。祖父なきあと問屋のおとこたちと商売の駆け引きをしなければいけないのだ。父は被害妄想に陥りました。母が浮気をしている。笑い話なのだがうわきという釣具屋があつて私は「かあちゃん浮気ちゃ、なんけ」と聞いたことがあります。母は聖母であるまこと聖母であるサザエさんなのである。父は一度「私の腕を折る」と母と喧嘩になって恫喝したことがある。集まった近所のみんなが遠巻きに嘆くような顔でまなこを見開いていた。私の細腕を逆手にとったのだが力が入っていなか

った。なぜあんなに優しい父がこんなことをしたのか。この疑念は不審につながりました。そしてようやく私はこの病になって初めて分かりました。つまり父は西行とおなじく美つまりエゴから離れるため縁側の軒先から私を蹴り落としたかったのです。だがそれは息子という個にたいするエゴイズムではないかと力が入ることはなかったのです。父はもういくばくもない命を感じ、なにを残せるだろうかと強く思ったのです。私は世渡りの処世術を教えることもできない弱いだけの人だったのかとっていました。だが父はいろいろなメッセージを投げかけ人の道というものを示唆してくれていたのです。まず他人の子供ほど可愛がっていました。私が嫉妬めいたことをいうと唇をかみ締めました。それが彼の示す怒りでした。食卓になめこの入ったうどんがありました。妹はなめこが好きでうどん少しと引き換えにあげることにしました。うどんをとろうとしたとき妹が泣き顔になりました。父は私のうどんをひっくり返しました。さもしいお返しなどもとめるなということでした。彼はいつもサングラスをかけ家の前をブラブラして道行く人を眺めては微笑んでいました。一度だけ言葉にだして叱られたことがありました。5年生、受け持ちはまだ新米の女先生、私はワルガキで成績は下の下、勉強しろとは両親から言われたことなどはなかった。

「高校にもいけない」「いけんでもいい」そんな会話が師弟の間で交わされた。帰宅すると父が言った「勉強しろ」私はいつしか泣いていました。妹は「にいちゃん、なんで、涙、流しとるが」と母に聞いていた。私は嗚咽をこらえることができませんでした。嬉しかったのです。父はもしかしたら自分の生きてきたみちを自己否定しているかもしれない、だから私に教育めいたことをいえないのかと子供心にうすうす感じていたからです。父はその翌年の二月に他界します。最後私と同じく聖霊、天使に導かれたみたいで。宮沢賢治が家業の質屋にくる農民達のことをおもんばかったように、父もまた酒を売って生きていく身がつらくてアルコール依存に走らせたのかもしれない。彼は心の中で神仏に詫びるのだと語っていました。これこそ南無妙法蓮華経です。これも本当に一度だけ二人でデパートに行きました。私に欲しいものおもちゃ、ゲーム、などすべて、なにひとつ駄目だとは言いませんでした。買ってくれたのです。神様のような感じでした。条件などなにもつけない、私は相変わらずのワルガキでした。そして思います、パチンコゲームの壊れたとき、空しさが現れたとき、つまり、ものなどはどうでもよかったのだと。彼は私のなかに思い出として生きていきたいような気がしたのではないのでしょうか

真由子先生へ

米国のコラムニスト、マイクロイコ推薦のジョンウエン主演「勇気ある追跡」を観た。

ジョンウエンは確かに暴力的であるが気持ちを高揚させるものがある。彼ならEDも嘆かないであろう。確率を考えて安全な道を選ぶということもしないだろう。

マイクロイコはネルソンオルグレンという作家とも懇意である。オルグレンは実存主義者サルトルのよくわからないがパートナーというかボーブォワールときっかけがあってつき合っていた。オルグレンは男らしく真剣に結婚も思慮していたみたいだ。

そして彼のその作品はおかしくて悲しい打ちひしがれた男たち、俺がやるという気持ちのうらでもし出来なかったらという苦い想いを捨て切れない人物たちが描かれていたのである。

無神論者かなんか解らないサルトルより品格も質的にも比較するのが憚られるくらい差がある。私は実はオルグレンの作品は拝読したことはない。何度も数軒の書店に注文を依頼したのだが絶版になっていて手に入らなかった。だがその内容はロイコのコラムからいきいきと想像できて感涙するのである。なぜか私の育った界限の男たちとダブるからである。ロイコも13の時からバーテンダーとして働き、私も父亡きあと12の歳から一合コップに酒をついで客の相手をしていましたからです。すり切れいっぱいこぼさず入れる。私のひとつの矜持でした。客はすするように顔を埋めてから、イッキに天を見上げるようにあおる。土木作業員、工場労働者、農家のひとプラプラしたひとが保健所の規制があまりないときに一時の安らぎを求めて訪れるのでした。私の原点はきっとそこにあるのでしょね。どうしても弱者にシンパシーを感じてしまう。いつかワンカップに移り変わり母はせいせいしたというのですが、私は一抹の淋しさをおもうのでした。賭事は本質的に好きではありませんがオルグレン作フランクシナトラ主演の黄金の腕を持つ男という賭博師「たぶん」の映画を楽しみたいと思っていますのであります。

真由子先生へ

カズマルが死んだ。漢字では一丸と書く。もしかしたらいちまるというのかもしれない。家がまだ酒屋を営んでいたころ、やまもとというかたわく大工が掛金を払わず往生したことがあった。母がひとりやまもとの住んでいる市営住宅の前に佇んでいるとカズマルがきて「かあちゃんどうしたかよ」と声をかけた。事情をはなすとカズマルは「分かった」といってやまもとを呼んできて「おれの姉貴を泣かすな」と一言いった。やまもとは母にどのような関係ながとびっくりし何日からして給料から天引きするという約束を結び、彼の親方が保証した。

カズマルはこれからも分かるように愛嬌のある少々強面のぷらぷらした人だった。どういふ関係もない私の父が親身になって若いころこういう言い方は変だが可愛がっていた男であった。義に厚いとかまあ変わった人だった。若いころはペンキ屋をやり晩年は大工のまねごとをやっていた。祭りには獅子舞に必ず現れ少しよたった声で威勢をあげていた。私は仕事がないとき同じ工務店の仕事を手伝うことになった。だが初日で年配の大工に罵声を浴びたのをきっかけに仕事を放り投げて家に帰ってきた。私はそれから反省し申しわけないことをしたなあと思ったのだが、カズマルの態度がその後会ったときに変わっていた。丁寧語を使うのである。男の世界とは解らないものである。工務店の社長もしきりにすまんと片手拝みをしていた。尻がこそばゆい気がした。二人ともこわもてのオトコを売りたい人たちなのに、おれはそんなんじゃないと言いたかった。しかしかれらはみなナイーブな気のいい入たちだった。

カズマルは甥の喧嘩の電話に特攻服を着て参上したり、眉唾ものだが小林旭と友人だと語ったりした。そんなカズマルだが息子の自死という悲しい出来事も味わった。それからなぜかよそよそしくなった、仕方ないか。奥さんができた入でスーパーに長年勤め家計を支えた。幾つで死んだのだろう寅さんと同じで年をとることを感じさせない男だった。

葬式に行かなかった。後悔した。母は手ぶらでもいかれず、かえって迷惑になると止めた。だが線香の一本も手向きたい。だが足がむかなかった。静かに手を合わせた。またひとつ父の思い出がこの世から消えたような気がした。

真由子先生へ

アキラ君のハナシをします。彼は私より四つ年下で今S病院に入っています。たぶん。社会的入院というのでしょうか。両親は健在なのか定かではありません。かなり前になります。実家が水橋にあって遠いけど幾度か訪ねました。お昼はいつも卵がひとつ煮込まれたインスタントラーメンをご馳走になりました。上二人のお姉さんは既婚者で学校の教師をされているそうです。しかし彼は無名の私立高校に入学しそこでいじめにあったそうです。彼のことをアンポンタンと表現する人もいますが、かれは感受性が強く、悲しく優しい歌を聴いては涙を流し、(大草原の小さな家)が好きでローラについて少しロレツの回らない話し方でよく語っていました。

ある日彼がバスのなかで乗り入れ客の若い女性たちみんなに「結婚してくれんけ」と懇願して回ったそうです。そのことを耳にしたひとりが「やっぱアンポンタンやの」と言い放ちました。沈黙のあともうひとりが「かわいそうに結婚したかったんやな」とぼつりと言いました。私は「そうやの」と賛意をしめしました。

彼はだれでも良かったといえど誰でも良かったのです。彼の心の奥にある純真な優しさを理解し無条件で認めてくれるひとなら。結婚とは彼にとってそういったことの象徴だったのです。この世、全宇宙のなかでたったひとりのひと、過去、現在、未来、三世に渡る、約束されたひと、彼の胸中（彼はだれでも受け入れるだろう）を察し静かに目をとじ指を組み感謝の祈りを捧げる人、そういう人ならもう他の条件は介在する必要はなかったのです。

アキラ君が「S病院はいいよ、水曜日にはラーメンがでるから」となんども言っていたのを聞いてから何年たっただろう。なんとささやかなことへの感謝と喜びの言葉であろう。

アキラ君ゴメン、昼でるか晩かまた教えてね。そんな会話もまたいいだろうと思うのである。

真由子先生へ

Aさんがいる。母の詩吟の仲間だ。彼女は80にもなろうとするがスクーターでどこへでもお出かけする。彼女の娘は私と小中の同級生である。そして娘の嫁ぎ先の夫がニシノという私の高校時代の恩人である。すこし複雑だがそんなに難しくもないでしょう。結局、中学時代からの英語は苦手のまま高校に入学した。赤点の連続。そんなときとなりにしたのがニシノだった「そんなもん英文と訳文、丸暗記すりゃいいがよ」つまり教科書の英文のしたに訳をつけて覚えりゃいい。そうか。私はその次のテストで70点をとることになる。私は受験勉強を含め勉強らしい勉強はしたこともなく、勉強というものはしてみるものだなと思った。ニシノも母子家庭で一度遠いところから自転車でサイクリングの途中家に寄ってくれたことがあった。わたしが無名ではあっても大学へ進学できたのはすべてニシノのおかげである。「ニシノありがとう」そのことをかねてからAさんに伝えたいと思っていた。Aさんはカラオケのとき牧村美枝子のみちづれを1曲だけ十八番にして唄うそうだ。きっといい人だと思った。母が、小冊子がないと大騒ぎをしだときも電話口けっしてあわてたり責めたりしなかったみたいだ。

水に漂う浮き草に、同じ定めと指をさす、言葉少なに目を潤ませて、俺を見つめて頷くお前、きめた、きめた、お前とみちづれに、寒い夜更けはお酒を買って、たまのおごりと、はしゃぐお前に、きめた、きめた、お前とみちづれに

大学に入学した年、野球部が早稲田と全国大会で決勝を交えることになり応援のバスがでることとなった。私は行かないと下宿の先輩に伝えると、「お前は愛校心がまだない」と少し酔ったように言い放った。

その先輩が好きだったのがみちづれだった。みんなに金を借りてコンポステレオを買ったとひとりずつ後輩に唄わせていた。あのころ4回生というのは大人にみえたなあ。今なにしているのだろう。きっと義理、人情に厚い立派なひとになっているのだろうな

忘れてないよう。Aさんにはうちの玄関先だったがその旨をお話させてもらった。ニシノのご母堂が最近亡くなられたことをきいた。強い語調だったが「中にはいっとられ」私が寒いと思ったのだろう、彼女は促した

みちづれは本当にいい歌だなあと思うのである。ああ、母の小冊子はどこからかでてきました。あわてものである。でもこのことから私はAさんの人柄を知ることになり母と一緒にいてくれる厚意に深く感謝するのであります

真由子先生へ

火曜日

孤独です

一緒の病室にいた、Mさんのことを、友人だと思った人に話しました。Mさんはかれこれ通算すれば40年は入院生活です。食べたくてもなにかが邪魔してノドを通らないみたいです。点滴をさしにくる看護師らもどう接していいかわからないのでしょうか。彼は深く傷ついています、心も体も。心ない言葉が無残にも彼に降りかかります。

彼は自分の入生を顧みて泣くのです。心を隠し、嗚咽をこらえ、ただ涙をこぼすのです。

カワイソウそうカワイソウなのです。上から目線でしょうか。

友人だと思ったひとは「なんとも思わない」そう笑い、そうそんな感じでした。受話器をおきました。元気なときってなんで人はこんなに想像力がなく同情を欠くのでしょうか。

自分の辛いときは、まるで天地がひっくりかえるように大騒ぎするくせに。やはり常に意識していなければいけないのです。聖書にもつねに目を覚ましていなさいとあります。良識、善意、親愛、友情は慈しみをうみます。森羅万象に対して。自由は幸福への道標、浮き草暮しの私ですが、えらそうにね。

Mさんに答えました。きっと可愛い娘が待っている、天国かもしれんし来世かもしれん。それでいいのだろう。それでいいのさ。一緒に歌いました。「なみだ恋」歌詞を、食事量を記入しているという小さな紙片にしたためてくれました。

私は一題目しか知らず、結局まるごとは覚えられませんでした。残念でした。そうです。神様がきっと彼のために用意した曲だったのでしょう。

夜の新宿裏通り、肩を寄せ合う通り雨

誰を恨んで濡れるのか

逢えば切ない別れが辛い

忍び逢う恋、なみだ恋

人生の集まりというフレームの中で損な役割を負わされているのかもしれないけど幸せになってほしいと強く祈念するのです。

真由子先生へ

一軒の田舎のスナックが閉店した。経営者だったママの健康状態が悪くなったそうである。彼女とは商工会の旅行で幾度か顔を合わせた。参加する女の子が少ないので店の子を何人か連れてきていた。卑猥なことも口にしたが、私には無口というか所謂普通の人であった。何度が店の方にも足を運んだこともある。2、3年前マスマユウサクという男とカウンターで一緒になった。松田優作と似とるね。私は笑った、ユウサクは「俺死にた、なった」というのが口癖だったらしい。あいつにそんな度胸ないとか、本当に軽度の知的障害（こういう表現でいいのか）があり親戚を含め家族からも馬鹿にされていた。カウンター越しにママに結婚してくれとなんどもくり返していた。彼は派遣の三交代勤務（いつ、どこ、だれ）水商売の人しか、いや男気のあるママしか相手はしてくれなかったのだろう。ママは既婚者であり彼の夢は叶えられるわけはなかった。そういえば彼はママの眼をみつめたりはせず宙をひとみはさまよっていた。私は「口説いてる」とワラツタ最低だった。彼はその数ヵ月後縊死した。55、6歳だったろう。妹の借金のせいだともっばらの評判だったが、きっといやになったのだろうこの世が。昔から、「またたのんちゃ」が口癖の気のいい男だった。その後ママの店では暴力沙汰などもあり大変だったと思う。そして息子はちゃっかり見合い結婚させ引退するのかなあとと思ったところだった。本当にお疲れさま。

30年前のカセットテープがある。三好鉄生だ。ケースには曲名も書いてない。

サンキューベイビー 酒場の酔いどれた天使さ
愛してた、おまえだけオーイエズット
サンキューベイビー だれもがあぼずれというのさ
あいつらにゃ、わからないさ、ベイビーこの恋を
悲しみにくじけた日もさみしさに泣いたときも
かわらない、その笑顔が俺の心をいつもささえてくれた
サンキューベイビー 男にだまされちゃいないか
しあわせを いつの日か ベイビー セイ アイ ラブ ユー

たましいがきしむぐらいに細い肩だきしめたい
心から ただ ひとすじ 愛しているのさ そうさこんな俺でも

サンキューベイビー いつでも シャア あいてるぜ この胸 オー
しあわせを いつの日か ベイビー セイ アイ ラブ ユー

私のこころの琴線にも響くのである
オスカーワイルドが言った「現実には芸術を模倣する」と

真由子先生へ

私の高校時代を振り返る時、輝かしい栄光、まあ人生においてでもあるが業績というものはないといっても過言ではない。つまりハナから期待しないし冷めていたというか他人の評価をあてにしていなかった。

家業が酒屋だし油にまみれるよりはスーツをカッコよく着て、口先、三寸での、半分詐欺師のような将来を夢見、芸能界にもあこがれていた。人を笑わせることだけには自信があったからだ。だが練習をしてうまくなって上位に行くというような感覚は好きではなかった。私は先にも後にも商業高校時代の弓道部に3ヵ月籍をおいただけでクラブ活動というものを帰宅部以外にはしたことはない。性に合わないのだ。先輩、後輩の関係とか。服従、権力というものにアレルギーを感じるのだ。結局今になってみれば称賛や栄光よりも魂の自由がほしかったのだらう。

部では体罰はなかったが説教と称して暗い密室で正座をさせ竹刀で床を打ち鳴らし反省、恭順を強制する。なにも思考することのないロボットになる、我慢が出来なかった。退部した。

同級生に俳優の西村雅彦さんがいる

彼との縁は不思議で直接交差はしないのだが彼の専門学校の友人が私のまたいどこだったり、家の隣人だったり、成功した彼、きっと彼は私の夢を替わってというかみんなうなずいて叶えてくれたのだらう。彼からはあまり生存競争の匂いはしない。私より少しとかかなり度胸と勇気と才能があったのだらう。

習いごとあまり好きではなかった、上達したからどうだというのだらうか。そのためについでやす時間とお金と労力考えただけで馬鹿馬鹿しい、見栄やハクをつけるためにやる。みんながやるからやる。クソだぜ。忍耐力がつく、協調性がはぐくまれる、礼儀正しくなる。

母はこの病になったとき単なる人間関係の問題で部活をしてなかったからだと片づけた。私もまだこの世の価値観につかっていた、一応納得したが。だが今、ことはもっと根源的で、主体性、良心といった人としての本質にかかわるような重大なものに連結していることが原因にあると気づいたのです。

私はニーチェがいうルサンチマンで価値の逆転をはかろうと思っているのはなくイエスを信じ、愛、思いやり、自由によりニヒリズムに陥らず平和に楽しく暮らすことが人間にとって必ず間違いなく幸福につながってゆくことなのだと確信するからなのです。

西村さんの方が当方とだいぶというが、ちがうなあ、ほんとう。それと油にまみれて働ける人は徳分があり、やはり持ち分なのであらう。

真由子先生へ

天皇陛下が80歳のお誕生日を迎えられた。孤独であったとされている。ご自分には皇位を継ぐしか選択肢のなかった中、先の昭和戦争においてたくさんの若者が夢を持ちながらも亡くなったことを心痛されていた。

私は思う、いったい夢とはなんなのだろう。有名になること、名誉をえること、栄光をつかむこと、大金を得ること、ペット代わりに赤ん坊を買うこと、尊敬される仕事に就くこと、そんなことなのだろうか。

天皇陛下は皇后様が支えてくれたと語られた。ここにひとつの答えがあるのではないだろうか。誰か自分を理解し傍らでそっと支えてくれる。そういう人が見つければ人生の夢はかなったと大声で言えるのではないだろうか。それが世界へとひろがれば素晴らしいだろう。

私は決して個人崇拜は認めるつもりはない。盲目的になってはいけないとも戒める。しかし天皇陛下、皇太子殿下から伝わってくるものは神がもつ愛とアナロジーしているのではないかと思うほど濃いのである。神は崇拜されることを望んでいない、だから観念的なのだろう。

夢が目的になってはいけないと思う。今が楽しく暮らせなくなるしどこか下品だ。

「まあ皇室のひとは生活に困らないからいいねか」そういう声が聞こえてくる。「どこへでも出かけられてうまいもん食べて」自己顕示欲の強いセレブとよばれる方々なら大喜びで公務に励むであろう。世界の貴人という人たちと交わって社交界に生きる。成り上がりものの夢であろう。

貴いと尊いは違う。貴というのは比較から生まれるものであまり本質的に価値はない。尊は金剛のように絶対的であり美しく価値あるものである。

「俺は天皇陛下だけにはなりたくない、なんでかいう、とずっと手を振ってなければならんから」顔にはそれさえなかったらなってもいいと書いてあった。「おまえの仕事はなによ」そう言っていたなあ、無職、遊び人、年金生活者、ただの病人、宗教家、エッセイスト、すべてはレッテルである。寺山修司はいった。職業は寺山修司だと。私もそれにならって小声で言おう、就職先は神の国であって生業は義人である。仕事は楽しければいいのである。

真由子先生へ

尾崎豊の映像と音楽を聴いている。自分らしく生き自由にこだわる、彼は悩み苦しみ叫びそしてひとつの愛を見つけ、そして理解者が現れ自己矛盾が生まれて去っていった。[世間知らずの俺だから体を張って生きていく][なれない仕事かかえて言葉よりこころ信じた][生存競争の中すりかえられる夢][愛や夢よりも金で買える自由がほしいのかい][馬鹿を気にするほど世間は狭くないであろう][自分らしさにうちのめされても愛や真心で立ち向かっていかなければ]彼の詞です。少年から大人になりいろいろなしがらみがうまれ優しい故に断ち切れず、一番嫌っていた支配、権力といったものも手にしていく。[自分の暮らしが自分を傷つける]と[自由になりたくないかい。本当の自由ってなんだい]彼は去っていた。見栄と偏見を厭いながら、たぶん。

ベニーマーシャル監督のレナードの朝をやっていた。医師役のロビンウィリアムスが[仕事、友情、家族、それより大切なのは純真な気持ちだ]と語りかける。彼が調合した試薬によりカタトニーから回復し、副作用によりまたその世界へ戻っていく。そんな姿を羞恥心をかなぐりすてロバートデニーロがすばらしく演じていた。薬より魂である。

恋のタイミングというのはつまり縁というのだろうか。精神医学では妄想になるのかなあ小津安二郎の作品を観てそう思う。

真由子先生とおよびするのは馴れ馴れしいですか、プレパルス抑制が弱い、つまり慣れない。これは一期一会ということを大事にしているからです。自分は、愛を告白したものの、逡巡していました。私は結婚した翌日に命を落としても悔いはありません。なぜなら結婚はたんなる法律の上の形式と効力の発生という話ではなく神にあたえられた加護による崇高な定めであり契約であると思うからです。

なぜ迷っていたか、先生は[彼を理解するのは自分しかいない]と言ってくださいました。言葉[ロゴス]は大切です。人を生かしもするし殺しもする。

釈迦はヤショダラ妃が実子ラフラに遺産をくださいと言ったところ即座に出家させてしまわれました。小国の王になり富や権力や名誉のために命のやりとりを行い猜疑心、嫉妬などの悪感情、策略、謀略、裏切りなどの悪意のなかに囲まれて生きることは決して幸福なことではないからです。しかし先生はどうか、と思ったからです。

私は先に話したワイアットアープのように先生を観念的に精神的に連れて逃げ出そうと思うのです。アープは女優に語ります「私にはプライドもなにも残ってない」「私には少し蓄えがあるわ」そして大人らしく現実的に生きるのである。さあボールは投げられましたよ。どうかえしますかな。

真由子先生へ

金曜日

尾崎豊が気になる。彼の卒業という曲の中にある「人はみな縛られたか弱き小羊なのか、先生あなたはか弱き大人の代弁者なのか」確かに学校というものは、国策により立派な兵士、産業従事者を育てるため、特に義務教育はつくられてきた歴史がある。つまりある時期はたくさん人を殺す人間をつくり最近では金儲けのうまい人間をつくるということが叫ばれているのである。まあ教育の目的という一面についてはこれくらいにして。

前段の歌詞であるが、聖書に羊飼いの譬えがある。神は牧童のようなものであって100匹の羊があつてその1匹でも行方がわからなくなると捜しにいくと。つまり束縛とみるか保護とみるか、神から自由になつても小羊は狼か大自然の犠牲になるであろう。神への感謝を持ち続けければ真の愛と平安が約束されるのである。また放蕩息子の譬えではどんなに父すなわち神から離れていても改心すれば神は涙を流し受入れられるのである。

私はなぜかヘルマンヘッセをよく読んでいました。(クラインとブァーグナー)という作品の中「身をゆだねることを学んだ者は、楽に死に、やすやすと生まれるのだ。抵抗する者は、不安に苦しめられ、つらい死を迎え、いやいや生まれるのだ。」「いったん自己を放棄したら、運命に服従したら、いったん自分のあらゆる支えと、足の下すべての堅固な地盤を捨ててしまったら自分の中の導き手の言葉だけに完全に耳を傾けたら、何もかも得られるのだ。そのときには、何もかももうまくゆくのだ。何の不安も、何の危険ももうないのだ」運命に身をゆだねさえすれば、不安から解放されるとヘッセは論してくれます。

われわれは神に保護され導かれ誘われている、人間は本質的に弱き小羊だと自覚しなければいけないのではない。そうでなければ謙虚さがなくなり思い上がり、自分に固執し道元のいった自己に対するところの他己を思いやり尊重する気持ちを無くしやがて崩壊していかざるをえないのだ。尾崎と話してみたかったような気もする。

真由子先生へ

〔人はみな縛られたかよわき小羊なのか〕〔先生あなたはかよわき大人の代弁者なのか〕
前にもとりあげた尾崎豊の卒業のなかのフレーズである。ひとつ気づいたことがある。聖書のなかの牧童の譬え、牧童すなわち神はけっして羊たちを縛ってはいないということである。放牧しているのである。縛っているものは悪魔によって一律、無個性にとりしきろうとする規則、道徳、悪意であり、それに気づいた自己中心的な自我が束縛を認識するのである。神は人間たちつまり羊たちを自由にのびやかに天気の良い日にエサとなるおいしい牧草のある場所へ誘い導くのである。けど、みんないつのまにか学校、会社、企業などの硬直した社会倫理に飲み込まれ自由を失い、目先の金のためにかばいあうように見えながら各自、先に行こうとあがくのである。尾崎に15の夜というのがある。〔盗んだバイクで走りだす。暗い夜のとぼりのなかへ〕〔自由になれた気がした15の夜〕始めはバイクを盗まれたひとはこまるだろうなと思ったのだが、なぜか口ずさんでしまう。ここである。我々は結局生きていくということは他人のバイクを盗むようなものだ。人の心をすてて鬼の世界（競争、争い）でいきろというのと、金持ちのボンボンが親に買ってもらったバイクを盗むのとどちらが、罪が重いだろうか。私は神からすればどちらも悪なのであろう。そして15の少年が家出の計画をたて罪の意識を持ちながら自由を求めなければならぬ現代社会、利便さと引き換えに失ったものはかなり大きいのではないかと思うのである。統一教会にいた男がいた。ローソンをやっていたとき来店し少し口もとを歪めながら笑みを浮かべ「そのセーブオンつぶれたよ」と罪悪感を持つことを促すように言った。つまりさっきから私が言っている鬼の世界であろう。確かに一理ある、しかしそれを意識するかしないかで大きく違ってくる。私はなにもセーブオンをつぶそうと店を営業したわけではないからである。その男はこの世に居場所がなくなり家とともに焼死した。私が言いたいのは心に自他の生存への不安とか罪の意識をもつより愛で満たす、この方が大事だということである。そうすればインチキ宗教にだまされずへんな壺などを売らなくてすむのである。不良に走るのもいっしょでその根底にあるのは孤独感、寂寥感のような気がする。みんな認められたいのだなあ。でもきつとどちらも真摯に自分と向き合った不器用な人間たちなのだろうと同情したいのだけど、いずれにしろ安易に答えをだすのはどうもなあと思う自分がある。どうしてか、それは、そこから、人々に不安を植えつける新たな鬼が生まれてくる。そんな思いがどうしても払拭できないからである。心理学、社会学的にはどうなのかわからないですけど、私見を述べてみます。〔盗んだバイクで走り出す〕、ご存じ尾崎の15の夜のクライマックスだが、教習所にも通わず、二輪車をあやつるとすれば90ccぐらいが精一杯だろ。中には天才的な人物もいるだろうが、幼児のころから金持ちの親に仕込まれたエリート達だ。極悪な暴走族とは違い、結構シャイで真摯に自分に向き合うナイーブな感受性の強い少年たちが曲からは思い浮かべられる。そういったかれらは〔夜の校舎窓ガラス壊して回った〕（尾崎の卒業）のなかの少年たちと同じく自分の存在さえ認めてもらえばきつといいので

あろう。尾崎の曲により疑似体験することで救われた子たちはたくさんいるだろう。彼がデビューしたことにより中学校の破壊的な行為も下火から消火に向かっていった。金八先生の腐ったみかんたちの心を代弁することにより実際的な暴力は表だって、消えていったのである。

私が思うにヤクザ映画、二時間ドラマ、俗悪と切り捨てるのではなく、何の代弁なのか象徴なのかよく見極めることが大切である。世の中がみえ、大切なのはなにかわかるものもあるだろう。こちらの視点である。

いじめ把握19万8000件（全国で文部科学省2012年度、発表）読売新聞の記事である、大津市の事件から意識が高まったからとあった。高まるも高まらないものもあるのである。いじめの内容は冷やかしからかいが12万件と一番多い。

やはりそこにあるのは意思の疎通であろう。指で流腸のまねをされて怒るものと好かれていると思うもの大きな差がある。

人生を喜劇とみるか悲劇とみるか。楽観的にいくか悲観的にいくか、深刻に考えるか、スムーズに考えるか、学級会でよく検討したらと思うがおとなしいやつは意見をいうどころか陰口もたたけないからなあ。とりあえずここをクリアしたらだいぶ風通しは良くなるみたいだ。とにかく思春期だからいろんな自意識があるだろうし。大人は競争を煽りながら仲良くせよという、ライバルのような関係が一番いいのか。

でもなあ俺は何も考えず、楽しかったらよかったなあ。ギャグだけ考えて、そりゃ能天気だろう。俺や明石家さんまみたいなやつが誤解されるのだろうな。いじめっ子として。あんまりいい答えが出ないけど、相手を見て尊重し、ここがむづかしい、邪険に扱うことが思いやりということもある。あまり周りを気にしないで正しい要求をしていくことが大切だろう。本当なんかうまい方法がないですか、先生教えて下さい。

真由子先生へ

自由には義務が付いてくる。世間ではそういう。それはちがうと思う。納税、労働、教育の義務それは独立したものであり、本当に自由であるということとはなんの関係もないことだ。その三大義務は否でも応でも社会に組み入れて行こうとするものであり、ひとの心の自由を疎外するものであるとも言える。

ゲゲゲの鬼太郎のうたが入ってきたオバケにゃ、学校も試験も会社も仕事もなんにもない。なぜかそれは、オバケは死なないからである。つまり死ななければ勉強したり働いたりなくていいのである。死ぬというのは一時のことである。死ぬまで生きているからつまり死という事実は感じることはないといった哲学者がいた。私が言いたいのは死んだ状態のことである。まあそれはさておき一時のこのためになぜ人はあくせくするのか。つまり生きる意味が問題なのだ。生きるために衣食住があるので、衣食住のために生きるのではないのだ。なぜ生きる。生まれたから仕方なく。そうなのだろうなあ。欲望が小さくなれば、生への執着も薄れてくる。だが世間は義務だから働けという。結果真実に気づいた勇

者たちは路上生活者となる。自死に走るものもいる。人間は必ず死ぬからだ。縁起でもないというやつもいる。そういうやつらはいくじなしで正面から死をとらえられない。結婚も出産も本能のままに行いだれも真剣に考えない。20代で、なにがし30代でなにがし、ルールから逸脱できない。そして定年とともに年賀状の減り様に唾然とする。そういった人たちはなにが自分の本音なのかも分からなくなってしまう。ただ人が旨いというものを食い。適当なときに適当な人と結婚し、みんなが感じるようなストレスを感じ、人に恥ずかしくない病気にかかり、かけてきた分損しないぶんの年金をもらい、楽に死んで行くことを願う。あっ忘れていた退職金もあったね。

ひとと比較し波風たてずにその場はしのぎ、腹のなかでは計算し嫉妬と羨望を回避しながら周りを見て膨らんだ欲望を小出しにする。家、車、衣装、ゴルフ、病気自慢。クソくらえ。だれも愛、善、美について語ろうともしない。

死んだ友人が夢に出てきた、俺は言った異人となった感想はと、感謝がなくなったといった。寅さんと三船敏郎が好きでよく、馬鹿っぱなしをした仲だ。俺に説教かと思ったが死んだら人と支え合う必要がなくなったと聞いたかったのだと目覚めてから思った。どちらがいいだろう。ささえあいながら生きてく人生と孤高をたもつ生と死と、とりあえず感謝は忘れずにおこうと思う。

真由子先生へ

少し不良少年たちの肩をもちすぎたであろうか。

新聞で学級崩壊のため自殺した女先生のことを知った。規則で縛るのではなく、自らの規律によってTPOをわきまえさせる必要があったのであろう。しかし彼女はなぜ教師にこだわったのであろうか。公務員の待遇がそんなによかったのか。逃げればよかったのである。おまえらみたいなバカガキなど知るかと。教師としてのプライドもあったであろうが。人間としての自尊心を捨てろとはだれも言っていないのだから。

5、6年生のとき受け持ちだった大学出たての女先生がいた。彼女も学級崩壊を経験し涙を流し強くなり理想を捨て現実に向き合い正常な学習空間をつくることができた。相手の機根を知り仏性を拝んでゆくことの大切さを見つけたのだろう。

ワルガキだった私だったが中学最初の学力テストで100人中6番の成績をとることになった。だがやはり相性である、担任で英語を受け持つ先生と折り合いが合わず授業中も悪友と大声で馬鹿話をしていた。中間テストは英語0点の76番に下がっていた。通知表は10段階の1をつけられ英語の成績は惨憺たるものとなった。それを笑った奴と殴り合いの喧嘩となった。まさに自然児である。テスト中にはクラスメートを椰楡した替え歌を高らかに歌っていた。隣組の番格をボコボコに殴り己を誇示した数学の先生は不思議に私には「おまえを見ていると楽しくなる」と笑っていた。なぜだろうか。私には規則も道徳も優劣はもとより善悪すらも意に介さなくなる、なにか特別なものがあつたのだろう。水滸伝に魅了されていた。

2年から持ってもらった国語の先生は特別、親身になってくれ、私は演劇の主役を何度も依頼されていた。泥棒の親分の役は断ったが、結局学校の新築記念にペテン師の役をやらされることになった。当時はなぜ俺がと思ったが演出まで手がけ、その立場だった優等生の女の子を泣かすことになった。先生は吉本新喜劇のようになるのも想定していたのだろうか。楽しかった。

私の成績はまた下がり83番となった。みんな競争なんか意識してなかった。帰りに（ごんにょんさ）というよろず屋でサイダーを飲んで相手を笑わせては嘔き出し合っていた。自由だった。英語の先生には12年前のクラス会でお詫び申しあげたが、その時うつ病に悩んでいるという話をされた。こんな時と場というやつもいたが、正直なひとだったのであろう、悪いことしたなあ、反省も、恥じ入り行なう、私です、現在、本当に人のころを見つめるというのは難しい。だから罪障消滅、南無妙法蓮華經を唱題するのです

先生へ

世俗的な意味での成功、不成功だけが唯一の絶対価値だと考えずそれに執着しない。さすれば弱者への優しさや慈愛が生まれ、なによりこころが自由になれる。

その通りである。しかし謙虚さと想像力を兼ね備えていないと自分のことしか考えないとんだ化け物が生みだされることもある。

厚顔無恥で他人の幸、不幸、心中も察し切れない。すべては縁起ではあるが、どこか冷酷になってはいけないのだ。ある人間の誹謗となりました。今日は青空だ。

そんな話はやめよう。最近聖霊の力が薄れてきたが、こんどはストレスや危機がせまったとき、頭痛に似た不快な様相を呈して啓示してくれるようになった。本当にありがたいことだ。私は守られている。けっして万能感にひたっている訳ではなく信じているのである。

神を、イエスを、南無妙法蓮華経を。

記憶も必要なことは頭に残りどうでもいいことは忘れてしまう。これもすべて神仏の計らい。ボケても、狂っても自己は残っている。認知症の人なんかは怖いだろうな。

仏道を一生懸命もとめるより思いやりを深めて行くほうが良いと思うときがある。

それが利他、つまり大乘の精神だからである。[俺はこんなに頑張っているのに頑張っていないやつはけしからん]と慢心するほうが怖いのだ。

[ありがたい今日もこんなに怠けさせてもらえる] そう感謝しなければいけない。

ただしこれは真面目に忠勤に励んだ人への言葉だろう。

でも難しいな。金とか様々な事情が絡んでくるから。目の前の人、やるべきことを、なるべく大切にす他ないであろう。忠勤という言葉にアレルギーを感じる人もいるだろう。

つまり神仏への忠義が大切。

[いま、自分、ここ]、これで道元は禪が解ったそうです。

つまり自分の道を歩いていく口笛を吹いてあせらずに。

先生ごめんなさい、えらく教訓めいて、聡明な先生には釈迦に説法でしたね。

ただ我が心中を知って頂きたくて。いつもありがとうございます。

母もいい先生だと喜んでます。これからもよろしく願いいたします。

お体にはくれぐれもご自愛くださいませ。

真由子先生へ

統合失調症の症状に注視というものがあるが、私は幼き日々誰かに見られている気がしてタオルを腰巻のようにして風呂へはいったものだ。私が思うのだがパンダの交尾をTVで観るのといっしょで人間の性の営みも間違いなく何者かに注視されている、パンダがそれをわからないのと同じで人間には認識することができない。神か悪魔かはたまた天使か。だから羞恥心は乗り越えなければならない。

お笑い芸人たちがハダカでテレビ局内を飛び回ったのも、自意識とくに羞恥心乗り越えるためだ。市井昌秀という映画監督がいるが、無防備という作品の中で妻の出産と放尿の

シーンを撮っていた。賛否はあるだろうが、奥さんは彼を愛しているであろう。釜山映画祭で優秀賞に輝いた。内容は自動車事故で流産しそれが原因で仮面夫婦になってしまった女が、後輩の出産に立ち会うことにより自分を取り戻してゆく。というものである。でもなんでこうも仮面夫婦や離婚が多いのであろう。飯くってSEXしてそれで最高ではないか。そんなすばらしい幸せはない。

しかし羞恥心という点ではストリッパーのひとたちには本当に頭が下がる、[カルメン故郷へ帰る]で高峰秀子が話すように芸術的なものもあるのだらうな。そんな嬢たちを愛していた谷崎潤一郎の気持ちがわかる。旧家の四人姉妹を描いた[細雪]はよかった。

健全とはどういうことか、明るいとは。近ごろ変な性教育を行っているらしいが。人間は畜生とは違う。こういう風にSEXし、そして妊娠する、そんなはなしではいけないであらう。やはり心のなかいっぱい愛情を神仏、悪魔に見せつけなければ。ひとはみな映画俳優である、できるだけ美しく激しく愛を交感したいものだ。そしてオンナたちは皆淑女をめざさなければならない。つまり気持ちの優しさ、純粹さ、寛容さである。それこそがレディである。人間は恥ずかしがらず、変な遠慮をせず堂々と自らの信ずることを主張することは絶対大事なのであろう。風雪に耐え何百年も立っているケヤキの木のように。

真由子先生へ

今朝の読売のコラムにいい言葉が書いてあった。堀口大学の詩である。[ひとは分をわきまえ気楽に生きるのが一番良い。そねみは自分だけを傷つけるものである。]そねみとねたみの違いを辞書で引いてみた。そうするとそねみは自分よりすぐれたものをうらむ、憎む心とあった。ねたみはそれに他人の幸運が含まれてくるそうだ。

もうひとつの悪意にひがみがある。相手の出方を実際より悪くとり、ものごとを素直にとらない。もしかしたらこれは私もあてはまるかもしれない。とりあえずあまりよくない感情らしい。

イチロー選手がいる。私はどうもというかなんとも思わない。好きな野球をして何十億稼ごうとも。だいたい投げた球を遠くまですりこぎみたいな棒で打って飛ばすやつが偉いという価値観が理解出来ないのである。

そんなことよりからだの不自由なお年寄りのお世話を一月十何万円の対価で働くこの世の聖人たちのほうが立派であらう。どちらがいなくなれば困るだらうか。反語ではなく正論である。競争の果てに一番をとる、そんな世界が素晴らしいのか。

だが介護の現場でもそんな世界が現出している、変な根性論と弱いものいじめ、猜疑心。しかしそこから誕生する崇高で高潔な鍛えられた精神がその相手となる人々へ深い思いやりとなり温かく寄与していくことを私は心から願うのである。

話とはぶがアメイジンググレース。かつて奴隷船の持ち主か船長だったか。罪悪感と後悔と俄悔のなかで牧師になった男がつくった讚美歌だ。神の道を歩むか政治家になるかウェルバーフォースは彼に会う。ウェルバーは戦うことを決意する。持病の大腸炎を阿片でこ

まかしながら、そしてそれすらもクリアしているために拒否し激痛にたえながら議場に立つ。仲間を得、ついに奴隷船廃止法案を通すことに成功する。ここに残虐で非道な奴隷制度に大きなくさびを打つことができたのである。ナポレオンは暴力で支配をしようとして一日も眠れない、ウェルバーは解放し家族の元へ帰り安眠する、そう議会は讃えた。だが今本当に奴隷は消えたのだろうか。賃金奴隷と呼ぶか、入よりも企業の利益の方が優先されるのが当たり前とされる。とんでもない話である、拝金主義に染まった悪党の威を借る狐たちが大勢いるのである。何度でも言う大切なのは金ではなく愛である。そう愛である。

真由子先生へ

無心とは、心に敵をとどめぬことをいう。心にとどめれば敵は大きくなり、心にとどめなければ敵はいない。つまり自らの愛ある生活を邪魔するすべてのもの仏だろうと悪魔だろうと心にとどめてはいけない。また心で感受するもので喜怒哀楽があるが自然の法則にしたがい。喜ぶときは喜び、怒るときは怒る。そして執着しない。その基軸となるものが必要であり、それは思いやりであり慈悲である。そして南無妙法蓮華経。それを神は喜ばれるのである。

自由に生きたいという素直な気持ちに従った。そのため自分のえらんだ境遇に不平不満を抱くことなく受容することができた。

バラモンが収穫で忙しいとき釈尊が托鉢にまいられた。「働かざるもの食うべからず」、と釈尊にもうした。釈尊は「信仰という種をまき精進という耕作をし、安楽という収穫を得る」という趣旨を詩にたくして答えられた。バラモンは感激して布施をしようとしたが釈尊は受け取られなかった。それは詩作という行為への代価として、ものをうけとることはできないということだった。ここに意味がある。説法は説法、布施は布施。勿論つながっていないとは言わない。だがギブアンドテイクの関係ではないのだ。釈尊は仏陀である。この世に存在していただいているのである。バラモンは働ける身を感謝しなければいけなかったのである。それにバラモンといえば祭祀を扱うのが仕事。苦役と縁は遠いだろう。下で働く人のことを慮っていたのか懸念される。今日そこらへんを勘違いし、金銭にはしる売僧がゴロゴロしているのである。世の中には働きたくても働けない人はたくさんいる。すべて宿縁、業縁である。だいぶ寒くなってきた、主体性を大事にしていきたい。へんな自我ではなく自己を大切に。また教訓めいてしまった。ごめんなさい。愛しています、ずっと。

真由子先生へ

寺山修司は言った「一番愛しているのが母親であり、一番憎んでいるのが母親である」と、彼の父亡きあと母は米軍将校とつきあう。そして親子は別れ別れになる。私の母とは少し違っているが、寺山の気持ちは痛いほどわかる。だが彼が憎んだのは母というより不在に

より襲いかかる、寂しさ、孤独さ、規範、道徳、呪縛、恋慕渴仰であり、そういったものが自分の心を不自由にしてノッピキならないものにしていくということであろう。

また希望の先取りともいえるレール引き。母親は子供の手足を食い散らかす鬼である。同感、共感である。やはりぶち殺さなければならないのである。でないといふ侮辱され続け、その過干渉からは真の意味での自由が得られないからである。母が聖母であればあるほど仕組みられた罠に入っていくのだ。その偽善さは耐えられないものがある。彼も母を汚されたようで辛かったであろうが、今の世はそんなことにこだわって生きていけないほど巷では凌辱が行われているのだ。母が旅行へ行く。躊躇している。53歳の男が、たった2日母親がいなくて困るであろうか。そんなに重要感が必要なのだろうか。彼は言った「想像力ほど高く飛ぶものはない」。「あの女のいないあいだに人力飛行機を飛ばすように、さあ」声が聞こえてきそうだ。

食わせてきた、養ってきた、学校出した、そんな脈糸がからまりつく。

聖書に招待客の譬えがある。土地を買ったのでいけません、牛を飼っているのでいけません、嫁さんを、もらったのでいけません、こういうひとはこの世のことしか考えていずその先は滅びである、イエスキリストの招待を受け、喜び、愛、自由、思いやり、平和を重んじそのためには両親、子、兄弟、姉妹さえも捨てて、ついていくというものだけが神の国へ入り、祝福を受け永遠のいのちを得るのである。

つまりしがらみではなく諸法無我の精神が必要とされているのである。主体性を持ち自分の為に関係はあると、みんなが思えばいいのである。すべてよかった。千客万来と思えば最高だ。あとは自分を縛り侮辱するものをけちらすだけである。子離れ、親離れ大事である。

真由子先生へ

ちょっとたくさんになってきて先生に迷惑になるのではと思うのですが、聖霊が促すので仕方なく記します。

木下恵介監督の善魔という映画を観ました。ひとが善いことをしようと思うとき強い魔性の力が必要だと、つまり善魔です。三国連太郎は愛するがゆえに死に行く薄幸の女性と親族というか父と姉だけの結婚式を挙げます。

私の祖父は明治25年生まれ芥川龍之介と同年です。8人兄弟の一番下の4男坊にうまれました。小学校は4年しか出ていません。成績はトップクラスだったそうです。ワルガキで女の子にも嫌われていたみたいです。

彼は一旗挙げようと大阪へ向かいました。家出といえは聞こえはいいですが口減らしの意味があったのでありましょう。

後か先かわかりませんが、彼はふたつのことを体験します。ひとつは釜が崎あいりん地区での土方の立ちんぼう体験から生まれた社会運動への傾倒、もうひとつは紡績工場での島根生まれの女工との出会い。それらの苛酷な労働の現実には彼の心に深い何かを感じさせた

みたいです。病弱な女工との結婚を決意し、そして数年後に彼女を看取るのです。彼はその後、再婚し病気をしたことをきっかけに帰省します。一応錦を飾ったわけですが。彼は農協に勤めてからも優しさは消えず。農家の若い嫁たちにこずかい銭を稼がせるため仕事を用意したりしました。そのことを感謝している人がまだ生きています。私は祖父をなぜか美化したい。そんな想いがいつも湧いてくる。

私はいつも思う。ユウサクに、アキラ君に今まで書いてきた人に対しオマージュを表す。こうすることしかできないのだろう、私としては最善を尽くしたのだろうと。ごめんなさい。先生、ゆっくり時間のあるときに読んで下さい。よろしくお願いします。

真由子先生へ

一年程前だったか、北海道だったろう。雪の中、軽トラが立ち往生して漁師の父親が9歳になる娘を抱いて一晩、そして凍え死んだ。娘は幸い助かった。読売新聞が特集を組んでいた。悲惨な事件、美談。少しでも波が荒れると漁には出なかった。臆病、ちがう慎重なのであろう。私の母はダラじゃないがかねえと切り捨てた。なんでそんな雪の中をと、しかし人間はそういう場合に遭遇するときというものはあるものだ。

私が言いたいのはこの父親ほど幸福な死に方をした人物を私は知らないということだ。

愛する娘を抱き締め、子守歌にきかせていたサッチャンをもしりナッチャンはねと繰り返して歌い続け、互いの鼓動を感じ、娘は父の大きな胸と愛の中で静かに眠ろうとするがその父の消え行く鼓動を静かに意識している。娘にはこれから生きていく上で負担になるのではという輩もいるようだが、確実に娘は親孝行したのである。

憎らしい義父が交通事故で死んだとニコニコ顔で話す嫁とか、何年も音信不通の親は認知症にかかりゴミ屋敷にひとり。体中管を刺され物質のように扱われる末期患者。精神を患い親の死に目にもあえず葬儀にも出席させてもらえないアダルトチルドレン。そんなそれぞれに訳のある親子関係の中でナッチャンのお父さんは至高の死を迎えたのだと思うのである。確か彼は私と同じ年齢だったと思う。お疲れさま。良かったね。

母はいつもいう祖母が「石川五右衛門でも煮えくりかえる釜の中、抱えあげていた息子を最後は足もとで踏みつけた。親にも限界があると」語ったと。私はその中に彼女たち親子の、情というものに対する執念のようなものを感じるのである。

松尾芭蕉のこんな逸話がある。彼が川の側を歩いていくと捨て子と思われる2～3歳位の女の子が泣いている。「泣け、自分のさだめを思い、泣け」芭蕉はたしか恨めとは言わなかった。そしてそこを立ち去る。彼の胸中は察して余りある。だがどこか鎮静していたであろうか。いややはり辛かったろう。当時は口減らし、身売り、奉公、捨て子ゴロゴロしていた。最近では震災で子を亡くし生き残った親たち、そんな世を生きて行くには宗教が不可欠なのである。

白隠禅師から印可を受けた、おさつ、婆がいる。孫娘が亡くなってワーワー泣く、それではせっかくの印可の意味はないと人は言った。おさつは、言った「おまえらの流す涙とは

ちがう。わしのは真珠の涙や」そうである諸行無常、ひとは死ぬ。だが悲しくなくなるのが仏教ではないのだ。悲しい時は泣く、それでいいのである。

仏様がみなよきに計らってくださるのだ。南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

そして南無妙法蓮華經

真由子先生へ

仏になろう、なろうと思っているうちはいく道は程遠いだろう。仏さまありがたいと想いをこめる人たちの方がすべては近いと存ずる。前にも話したが自他の生存の不安や、罪悪観を持ちこの世を煩惱に焼かれる火宅とみることは苦しいことで避けねばならない。そこから逃げ出す、つまり感謝、慈愛で心を満たすことが大事である。さすればこの世は仏の遍満する世界に一変する。

北野武監督のソナチネを観た。暴力ヤクザ映画だ。彼はフランスで特に人気がある、その利己的ともいえる個人主義、かわいている虚無感が国民性に合うのであろう。オランダとかいう為政者も女ともめていてなあ、前のサルコジも。

映画の中で印象的だったのは自殺しようと夜の浜（沖縄が舞台）に村川（たけし）が出ていくと女が乱暴されそうになっている。彼は見過ごして行こうとするのだが、男に「見ていたのか」と因縁をつけられる。そして村川は持っていた拳銃で男を撃ち殺してしまう。ここである。普通の人ならどうする、本当にケンカの弱い人なら、静かに心の中で申しわけないと南無妙法蓮華經を唱えることだ。

警察官ならばそれは止めなければならぬだろう。それがダルマだからである。良寛さんは侵入してきた泥棒に一枚しかない布団を寝ているふりをして盗ませたそうである。僧には僧の泥棒には泥棒のダルマがある。ダルマとは持ち分と思えばいい。

村川に結果的に助けられたかたちになった女は、殺された男は亭主だったと打ち明ける。簡単に人を殺せる村川を強くて好きだという。彼は笑いながら「弱いから殺すのさ」という。死ぬのも怖くないんでしょとたたみかける女に、「死ぬのが怖いと死にたくなるのさ」と、またしても笑みを浮かべながら話す。彼は無邪気だ。すべてに執着がないようにも見える。死との闘い。ヤクザにはヤクザのダルマがあるのだらう。最期マシンガンで自分を裏切ったやつらを皆殺しにして自らの頭を打ち抜く、バイオレンス、ヤクザのダルマの結末はそうでなきゃなるまい。

沖縄の海はどこまでも青くて美しい、北野武は、それなのに人間たちは愚かしいことを繰り返しているということを表したかったと言っていた。

米軍基地移設問題なども存在するが、映画ではなく現実に沖縄を含め世界中で残虐非道な殺し合いは行われてきたのである。

対比するように恋に生きた車寅次郎はどこかお寺の境内で夕日に包まれて静かに眠るように最後を迎えるという予定だったという。私も後者の方がいいなあと思うのである。

真由子先生へ

今年亡くなったジュリー・ルイスがエデンの東の中で言っていた、「人は愛されないといじけてしまう」と、人はどうして自らの愛の代価に愛を欲しがるのであろう。

ある太目の、いやかなり太った女の人があった。ブス、ブスと幻聴がきこえるようだ。今まで男性とはお付き合いをしたことがない。誰にも愛されたこともない。

だがそれよりも彼女に尋ねたいのは男の人を本当に愛したことがあるのかということだ。愛されなくてもいいではないか。申しわけないが言わせてもらおうとそういう人に限って条件が厳しい。金持ち、ハンサム、優しい、スポーツマン。

そんなことより大事なのは私なんかどうなってもいいあなたが幸せならば、つまり無償の愛をつらぬくことではないであろうか。男も馬鹿ではない、嫉妬深くない気持ちの柔らかい女なら、心有る奴は放っておかないのだ。男は外見ばかり重要視するといらつく前に自分はどうかと自省することが大切だ。たとえ愛する彼が違う人を想っていたとしても、静かに微笑みを浮かべよう。幸福は近いだろう。

彼女は「親に孫を見せてやれなくて残念だった」と言ったが一見もっともらしく聞こえるが大変なまちがいである。愛する人の子を生みたいというのなら分かる。大人の男女の関係に親が介在する余地はないのである。たとえ子供が出来なくてもいいから結婚する。これが本当である。たとえ余命一ヵ月でも。

いまだに形にとらわれ愛を成就できないカップルがたくさんいる。愛してくれないんなら愛さない。めんどくさい手続きと舞台設定に金と時間をかけそれが愛だと錯覚し、いつときの夢に浸りそしてさめ、離れて行く。そんなこんなの繰り返しだ。

私は幸せだ。恋愛だけではなく愛する人たちがたくさんいる。人は鏡である。想いは伝わるとかたく信じている。エロスでもなくラブでもないアガペーと、キリストの愛はそうよばれる。みんなが保つことになれば博愛というものも成り立つのかもしれない、だが主体性は失ってはいけない、どこかの怪しげな合同結婚式という声が聞こえてくるからである。

真由子先生へ

おひさしぶりです。先生はいかがおすごしになりましたか。この正月、私の胸中はあなた様のことでいっぱいでした。

年末に私の原稿をお渡ししようといたしますと「読んでないのがまだあるのに」とおっしゃったときはどういう意味か少し考えました。このような厳しいお言葉を先生からお受けするのは正気に戻ってからは初めてのことだったからです。母はいつもご負担になるのではとお聞きしたら病状を知る上で大変興味深いというご返事が反ってくるよと話していました。なぜだろう、当人として感謝の言葉が足りないと思われたのか、はたまたそうして私の忍耐の強度を試されたのか。いや確かに量は多かったですね。申しわけありません。気をつけます。ごゆっくりで結構です。心読していただけたら有難いです。真摯なものを、ドラマツルギーを大切に喜んでいただこうと誓い、いい加減な気持ちで表したものはひとつとしてごさいません。ご厚情にて好意的にご批判賜りたく希求いたしております推察すると原稿になにか反発、嫌悪すべきことが記されていたからか。私に思い浮かんだのは2点あります。先生をゲシュタボの女看守に譬えたこと、それとブスブスと聴こえてくる太めの女性のはなし、もう一点あります、人間の営み、心中がなにものかに注察されているというものです。

先生、覚えていらっしゃるでしょうか。私がソウ気味になり薬を拒否したときのことを。私は医者です。ならば注射をうちます、社会復帰をするためですと端然としておっしゃいました。その後ジプレキサの効果があまりなかったのに黙って飲んでいてくれたと切なく感謝していただきましたね。医者の象徴とも言える白衣は圧力と冷たさをもたらす場合があります。でも多くの人やはり安心感と優しさを感じとるに違いありません。

耳の不自由な男子がいましたね。先生は前かがみになってその筆記にこたえておられました。この方はお心の温かい人なのだなあ。後ろ姿の半袖からみえる二の腕の白さが瞳に焼きつきました。そしてその瞬間をむかえます。先生が病棟にこられなかったので、眼前にうごめくアメーバー状のものについてお尋ねいたそうと思い、スタッフルームに顔を入れて先生の御名をお呼びすると、すぐさまパソコンの操作の御手を止められ、小走りに近づいてこられました。そして行儀の悪い私の眼を覗きこまれたのです。私は稲妻にうたれ、心に雷鳴が轟くようにつまり恋に落ちたのです。尊敬とかそんなことでない「可愛い」素直にそう思えました。この恋は違う。生涯、何度もあるものじゃないと固く信じました。以上が悪魔から生まれ変わったと聖書にあったとする現証です。

幻聴がある女の人の場合ですが、誰かに恋をして夢中になり、「誰かに取られるくらいならあなたを殺していいですか」と、歌にもあるような女の強い情念を持つこともひとつの扉を破るエネルギー源になるのではないかと思ったのです。(ストーカーはまずいですが)勿論、女性に対しての一般論ではありません。対機的に、そのとき、場所、場合、ひとりひとりの性格をも十分に考慮しなければならぬと思います。私は彼女が自分を束縛している家にまつわる道徳観念から解放され、素直に自信をもって男性にアタックするという

行動に踏み出すべきだと思うのです。人の好みは千差万別です。恋愛に限らず、ジェンダーを問わず愛する人をたくさんつくり、そして静かに微笑みを浮かべるべきです。幸福は近いと思います。心が思いやりで深くなるからです。大切なのは真実の愛です。

確かになにものかに注察されているというのは気分が悪い。いやそれだけで済まぬことかもしれぬ、不気味なことです。でもこう考えればどうでしょう。お天道様は、お見通しと昔の人はよく言ったものですね。それは自分の心の美しさと善意をすべてご存知な方がいるというだけで楽しく、嬉しくなるということではないでしょうか。そうすると孤独からさえも逃れることができるかもしれません。また懺悔もできます。謙虚になり、神の御守護を受け安心へとつながってまいります。いいことばかりです。だから他人の評価よりも、自らの中の神仏と天の神との感応を、信じ愛をもって生きていくことはとても大切だと思います。南無妙法蓮華経ただ南無妙法蓮華経

先生と問診のとき、どう会話をしてよいか分かりません。うかつに恋の話題をもちだし否定でもされて場の雰囲気や心の状態が悪化してもいけない、だから慎重になる。いや違います、私の調子なんかどうでもいいんです。なるようになるだけです。しかし、お答えをいただくのは確かに怖いことなのです。うまく説明できず、私も辛いところです。

先生は公人でいらっしゃるんですか。私にはよくわからないのですが個人的に友人になってはいけないのでしょうか。日曜日にデートして会話をかわせば30分以内、5000円お支払いしなければなりません。それでも私は嬉しいですけど。私がたどり着きたいの是一片だけなのです。[愛を受け入れ、ただそばに居てほしい]。少し妄想気味でしょうか。やはり恋はお医者様でも草津の湯でも治らないのですね。

しかしお互いの立場が悪くなり主治医を代わる、ということだけは絶対に避けたいです。私は先生に大恩があります。そして私は決意しました。神は花占いのようなことをくり返す私の覚悟のなさを、はがゆく静観していたのでしょう。今日やっと神と先生への愛が両立することができるという自覚と自信が生まれました。私は先生の個人情報はずっと何も知りません。でも私には人間を観る眼はあると思います。それで十分です。私と結婚して得することはありません。強いていえば手がかからないということ、誠実義務を果たし約束は守るということです。でもこれにて確実に幸福になれると思います。愛しています。一緒に自由と愛ある結婚、生活を求めていきませんか。

年頭に我が身の置かれた立場すらわすれ恋文をしたためる、この馬鹿を哀れと思しめされるなら、どうかこのプロポーズお受け下さるよう平にお願い申し上げます。

そしていい知らせにはならない先生のお心もちならば私も男です。こらえるところはこらえますから、忌憚なくお気持ちに向かわれたときお話しくださいませ。では寒い時期が続きます。街の片隅より大きな愛でお健やかなることをお祈りいたしております。では——美しく聡明な真由子先生、あれからずーと好きでした。宇宙——

幸福を望むすべての人へ

悪魔も神の子なのである。だから神と悪魔は連携しているように見える。民衆の帰順を欲しがった悪魔の嫉妬によりイエスは十字架にかかった。イエスは悪魔を厭いながらも兄弟とみたならば始末することは出来なかった。イエスには報復、敵対の概念はなく、愛、あわれみの実在しかない。

人間はなぜやさしさや悲しみを知る必然性があるのだろうか。難問である。なぜ戦争がなくならないかという問いとも直結してくる。それは神の実相が慈愛、慈悲であるからだろう。古代よりそのことに気付いたものもたくさんいたにはいたが、大半の人物は成功を夢と錯覚し自らに執着するようになり、自由、愛情を外的条件に求め、悪魔に魂を売り渡し、やがて崩壊していったのだ。

心の自由こそが求められるべきものであり、牢獄の中においても自らの想像力により海を飛び山を越え愛する人を連れ宇宙の果てまで到達することができるのである。心中の神、つまり聖書の神はわれわれ人間を楽しませようとしてくれている。

それがたとえリストラ、失恋、欠損などであってもそれはそのときに必要なことであり学ぶ姿勢になればなにひとつ無駄なものはないのである。周りはこの世の価値観を植えつけようとするが果たして現在、満足して幸福だと思っている人間はどれだけいるだろうか。そんなことを考えない人が一見幸せに見えるが大概わがままで感情的である。人生の深いところを思索するひとは物欲、名誉欲より世間にかかわらず静かに暮らしたいと望むものである。そこに幸福があるからである。

この世の業績、栄光、それらは真の幸福とはなんの関係もないのである。そして善知識つまり良い友人を持つことが聖なる道のすべてであると釈尊は言っておられる。

貧乏を嘆くよりさとりが近いと微笑んでみる。他との比較をやめる。それだけで人は大安心を得て真実の愛に即、達するのである。そして孤独より離れ大楽を得るのである。

私もかなり回り道をしましたが、幼稚園からすぐ大学にはいけないのと一緒にいろんな経験、前段で記した不幸を、前向きに問題意識を持って格闘、接触、抱擁、反省、得心したからいまの境涯に至ったのです。

でもこれを読む人には、そんな苦勞をしてほしくないのです。

薬のおかげかもしれませんが軸はぶれてないつもりです。私はでくのぼうです。でくのぼうだから神の心が分かるのです。心中の神つまり善、愛を抱きしめてください。私の大きなお願いです。私はただ南無妙法蓮華經と唱題するだけです。

真由子先生へ

母の感動秘話みたいなのは抵抗あってあまり好きではないのですが、観音様のありがたい話なので紹介します。祖父がどこかで手に入れてきた観音様の座像が床の間にかざってあります。祖父、父、祖母が相次いで亡くなり、さすがの母も心細くなりました。

夢のなか母は切り立った、せんじんの谷にまだ幼い姿の妹と私を連れて立たされます。彼女は祈りました。「私はどうなってもかまいません。どうかこのふたりだけは通して下さい」すると細い一本の道が谷にかかります。そしてその先には緑の観音様の下半身だけが現れたそうです。よく宗教は弱い人間がやるものだという人がいます。強いとか弱いとかはどこで判断するのでしょうか。死ぬのが怖くない。これは畏怖を知らないただの馬鹿である。人を思いやる気持ちを持たずに踏み台にさえできる、これが強い人だろうか。本当に強い人とは真正面に自分の弱さと向き合い自分の情けなさを痛いほど知らされ神仏へすべて委ねることができる人間ではないだろうか。優しい顔、柔和な心、愛情ある言葉で人に接する、これが自然にできれば観音様である。なぜ観音様は母の夢のなかで全身を見せられなかったのであろう。それは大事なものは偶像崇拜ではなくあくまで信仰心によって義とされるからである。母の信仰とわが子に対する想いのおかげで観音様が家族を守って下さったのである。そして感謝する。ここには強いとか弱いとかいう変な自意識に基づく価値観はなく、ただ素直な気持ちがあるだけである。

だが折角、谷の向こう側に達した私は無名の私立大学に遊学し母に散財をかけ今日を迎えている。親不孝だろうな、この世では。

話は変わるが私の家系は枝葉ではあるが南北朝時代に京の都からはるばる法華宗を広めるためお坊様と一緒にこの地へやってきた武士だったそうである。侍をやめ百姓になるのだが、そのおかげで私も生を受けることができた。戦に負け腹をきるというのもばかばかしいことであらう。そしてこの因縁から私の使命ははっきりした。南無妙法蓮華経の道、その道をひたすら歩むことであるということが。

真由子先生へ

捨て猫が泣いている。私はどうしたらいい。眠れない、サタンの仕業か。この寒空に、かわいそうに私がどうするか見たいのか。芭蕉のように静かに無視するか。まてよ。缶詰めみたいな高級なものでもなくとも、おかかと煮干しでならうちでも飼えるのではないか。しかし哀れである。聖書を開くとひたすら神を愛せよ、隣人を愛せよ、それは犠牲や祭りより神の望むところだと示された。いまの場合の隣人とは。朝6時。一睡もできなかった。一階に降りていき母に告げた。「飼おう」母は向こうからきたのだから縁があるがやと嬉しそうに牛乳とめしを用意して家の裏に置いた。

南無妙法蓮華経を唱えたが流すことはできなかった。やはり目の前で苦しむものに酷薄に相對することは神仏の望まれないことなのだ。餌付けがうまくいくといい。自己満足ではない。人としてただ心中の神に従っただけのこと。そして私は気づいた。母がかつて夢のなかで「私はどうなってもかまいませんこの子らふたりを通して下さい」崖のふちで祈ると観音様が細い道を渡して下さった、そして母が「我ら3人をお助けください。そしてあとからくる入みんな助けてあげてください」と祈っていたら崖そのものがなくなりお花畑になっていたのではないかと。聖書に記されているように犠牲はもういいのである。素直になり愛を分かち合う、相手のことを思いやる。そんなことを神仏は喜ばれるのである。私もどこか自分に固執していたのかもしれない、正か邪か善か悪かと。悪ならば悪でいいではないか。私を悩乱させるためにサタンが子猫を用意したとしても、寒空の深夜、泣き続ける命をどうして無視することができようか。こんな慈悲、慈愛のところが世界に平和をもたらすと信じたい。シリアでは一万人の子供たちが殺された。その恐怖はいかほどのことだったろう。子を失った親たちの無念さと悲しみは察しても察し切れるものではない。私は無関心になっていた。どこかで自己弁護をしていた。自分の無力さに浸っている場合ではないのかもしれない。

真由子先生へ

田口ランディという作家がいる。アルコール依存症の父親をもち兄は精神を病んで自殺したそうだ。心理学者は「機能不全家族」「アダルトチルドレン」とよぶだろうと記している。今は亡きユング心理学者の河合隼雄さんに「お父さんのおかげで作家になれましたね」と言われたそうである。いろいろエピソードが尽きないということであろう。それと苦しみゆえに救いを求めて本を読み瞑想をしておろおろしていたそうである。

しかし私に妻子がいなくて本当によかった。これもすべて神仏の縁である。私は鍛えられ導かれ、罰を受け許され、志を領解されたのである。この先どうなっていくかと思うとわくわくする。戦争になりさえしなければ。

この世は真実の愛と平安を見つけるための大舞台、苦しみも悲しみも楽しまなければいけないのである。話はピョンピョンと飛ぶが母が米を買ってきた。(てんたかく)、安売りだったんだろう。勝手口から運び米入れ機の中に流し込んだ。なにか感謝でいっぱいになった。母を叩き殺してやろうと思ったのは一度や二度ではない。単純で短気だから合わせていると結局、喧嘩になってしまう。先生の言われるように離れているのがいいようだ。

老いが忍び寄り、生への執着が強い分だけ最近はいらつくのであろう。だが献身的な人だ。愚痴をこぼしながらやらなくてもいいことまでやる。米入れ機の中を覗きこみ、いにしえのだれだったか忘れたけど、米櫃の中に米があるほど嬉しいことはないとうたをよんだ人のことを思いだした。母は父亡きあと食べさせてくれたのは事実だなあと思った。餓鬼の様相になる母。お涙ちょうだい話にも持っていけるが母の偉大さはここにある、そんな気を起こさせないのである。いつまでも鬼ババアでいて下さいといえればいいだろうか。

母方の祖父が50歳をこえてから生まれた。祖母は42だったそうだ。先に何人も死んでいる。産婆さんが祖父にどういう名前にするかきいたそうだ。祖父は苦しそうな顔をして「どうせすぐに死ぬんだから」と言い放つと、あんたが付けてくれと言ったそうだ。産婆さんは「昭和になったから昭子でどうけ」そう決まったそうだ。豊臣秀吉のように祖父は一度生まれた子を捨てたのであろう。そしてその子は天真爛漫な我儘で意志の強い人間へと育っていく、今宵はここまでにしよう。

真由子先生へ

オードリー・ヘップバーン主演の尼僧物語を観た。彼女はコンゴでの看護人としての務めを果たしたいと思っているのだが、修道女として従順でないとされ意見、願望を否定されてしまう。

感性が豊かなのに自分を律していこうと思いきり過ぎるため、戦争で父が殺され感情的になり相手を憎んだとして会を去ろうとする。私は痛いほどその気持ちはわかる。だがなぜか共感できない。私の感受性がマヒしたのだろうか。いやちがう彼女が自然でないからだ。会にはいろいろ戒律がある。組織の上のものたちはみな鉄面皮だ。自尊心、高慢をなくしそして従順に。これこそイエスが嫌った、律法学者パリサイ派、神殿を守っていた頑迷なサドカイ派である。ひとの心より組織、戒律を重視する。悪魔の受け持ちだ。

結局、彼女は心を病み、会を去っていくが。

いったい彼女にとってのコンゴとはなんだっただろう。自己犠牲の舞台。映画では詳しくふれなかったが、ジンという男性の影がちらつく、何か心の悩みからの救いを求めているのだろう。そういう体験はやはり客観しなければならない、今自分はどうかあるのかと。不幸にも彼女の父も立派な外科医だった。弱音を吐けないのだ。正直に自分の気持ちを。そして神への直接の告解としようして神に責任をかつける。まるでかつての私だ。確かに世の中はずるい馬鹿者が多い、でもきつと理解し明日を教えてくれる人はいるはずだ。イエスに対抗することはないのだ。みんなのために彼は死んでくれた。そのことに感謝すればきつと自然と死さえも乗り越えられるだろう。

イエスは自己犠牲など決して求めていない。私を信じるもの、すなわち愛を信じ保つものは生活には困らないと言っているのだ。つまらない利己的な愛に埋没せず、従順どころか主体的に無理なく生きることが大切だと言っているのである。人間味にあふれ素直な人は変な名誉欲も金銭欲もあまり出てこなくなるみたいだ。それで正解である。安楽への道が開かれる。借金で死んだやつはいるが、貧乏で死んだやつはいない。ありゃこれは蛇足か

真由子先生へ

大林宣彦監督の異人たちとの夏を観た。山田太一原作、脚色市川森一、面白くないわけではない。片岡鶴太郎が渥美清ばりの軽妙な演技で妻役の秋吉久美子とやりとりしていた。寿司職人の彼はプライドが高いが客を大事にし、知ったかぶりもしない。常に氷水に手を浸し新鮮なネタを提供したいと思っている。彼らは主人公原田の両親でじつは28年前に交通事故で亡くなっていた。彼らと遭遇する原田。脚本家だが仕事にいきづまりプライベートでは離婚を経験する。父親は自らのポリシーに反するとすぐに店をやめる。腕がいいのでまたすぐに勤め先は見つかる、そうゆう設定だ。みんなが恐れているギリギリの生活ならみつかるものだ。原田は気付く自分に大事な人としての情が欠けていたことをどんなにおしゃれな会話、舞台仕掛けを並べても愛がなければひとは感動してくれない。

正しいことにこだわり続けてきた。

頑迷なパリサイ派の人とは自分だったのではないだろうか。私はそう思った。
そして原田にとりついた美しい女の幽霊いや異人、「過ぎさった過去は取り戻せない、とゆうが自分の過去だから自分のものである」と彼が創作して忘れていたセリフを口ずさむそして逢瀬を重ねる度に彼は疲弊してゆく。牡丹灯籠を彷彿させる。結局友人の助けもあり彼はこの世で生きることになるが、異人たちへ未練というか恋慕の心が去らないのである。そして彼はそれを嬉しく思うのである。
えせ文化人、義人、粗略に扱われることがあっても腹をたてず思いやりを持って生きていこうと祈るのである。私の中なのか眼前なのかも解らないこのひと夏の体験も楽しかったなあと大切に抱きしめているのである。

真由子先生へ

山本薩夫監督の白い巨塔を観た。

嫌な気分だった。

喜ばれぬ命を掻き出すことを財前五郎の義父はドブさらいと破顔して芸者に抱きつく。稼いだ金はどうせ汚い金、色と欲まみれのもの、なんぼでも金看板のためにはつぎ込んでやるとゆう話だ。

またすでに看板をしょって、いる人物達はもっともなことを言っているがすべて保身と自己への固持だ。

テレビでは癌におかされた五郎が最後は改心するという殊勝な結末だったが、こっちの方はその場面は切り捨てられたのか、裁判で不利になる証言をした里見が大学病院を去って行くところでエンドする。

山本監督は人情劇に終わらせず、人間の醜悪さ、狸雑さそして浅ましい面を見せつけることでこの群像劇を完成させたのだ。

彼らを迎える芸者たちはだれも明るい、金か、そう振舞わないと病氣や妊娠の怖さに押し潰されるからか。いやもう慣れっこになっているのか。客商売だからどんなときも愛想が大事か。しかし楽しそうだ、芸は売っても身は売らぬと昔聞いたが、欲望がギラギラした男はきっと魅力的にみえるのだろうか。所詮はオモシロオカシの世界である。

しかしみんな知っている飾った世界だと、真実を知るのが怖い。その影で忘れ去ったようにみえる罪悪感。

イエスの足元に涙した娼婦や徴税人達の真の心。

みんな愛する家族がいる。だからなお逆に他人に対して冷たくなるのでないか、芸者たちも郷里で待つ親兄弟のため、心を殺し偽善と高慢と好色と貧欲に満ちたやつらに合わせながら倍返しする機会を狙っているのではないだろうか。

五郎も故郷に母を残し、彼が愛しているのはきっとその人だけであろう。なぜか患者の家族の気持ちが察せられない。不思議だがそうなのだ。謙虚さと想像力が必要なのであろう。シェフェンド河という1965年の映画の中で主演のジェームススチュアートが息子を北

軍の若い兵士に眼前で射殺される。聞くと行方不明になった末の子と同じ16歳だ、怒りをこらえながら彼は「結婚してたくさん子供をつくれ、その中のだれかが殺されたとき私の気持ちが、無念さが分かるであろう」と

真由子先生へ

「スキャンダルと美談は紙一重」、居酒屋兆治の中で発せられるセリフです。褒められたり、けなされたり、大変だけど、素のままの自分を信じて行くしかないのだろうなあ。

「心に思うことは止めたり縛ったりはできない」でも相手を大切に想い誠実に意識していれば誘惑に負けることはないと思えることができるだろう。

話は変わるがチェゲバラという革命家がいる。彼は（新しい人間）になろうとキューバの人々に呼びかけ、さとうきび畑、工場で率先して労働に励んだ。新しい人間とは自分より相手を優先しみんなの為に力を尽くすそんな人だそうだ。犠牲、献身。共に闘ったカストロは「かれの思想がみんなに浸透していたら世界は違ったものになっていただろう」

つまり社会主義は成功していただろうと。かもしれない。ゲバラはコンゴでの成り行きに失望しボリビアにて捕らわれ銃殺された。構えたが躊躇する若い兵士に「俺はただの男だ撃て」と叫んだそうだ。相手の立場を思って言ったのか、それとも神に対しての謙遜か、自分に対する失望か。判断はしかねるが、彼の役分だったのだろう。暴力革命はその品行によりならず者のテロと紙一重の意味を持ってくる。世論を味方につけるかどうかだろう。日本のGHQ占領下での農地改革により、自らの田畑を持った小作たちは生産をあげ食料難が解決されたと聞く。やはり人は自分の利益のために働くようだ。だがゲバラをただの空想家、理想家に終わらせて良いのだろうか。キリスト教社会主義というものがあるがその内訳は、私はよく知らない。私が望むのは（みんなが適当に好きなことをして富が公平、平等に分配される）そんな世界である。だがこの世はどこも思惑がからみ未完成な法律、欲にかられた暴力に支配されている。人が人らしく安楽に生きて行くことを神は望んでおられる。みんなが主体的に敵までも愛さなければやはりいけないのだと思う自分が今いる。

真由子先生へ

三隈研次監督、眠狂四郎炎情剣を観た。すごい、柴田練三郎の原作が素晴らしいのだろう。小さいころは円月殺法のかっこよさだけに見とれていたが、色と金に追い詰められ生きる大半の人々、その腕には関わりたくなくても関わってくる。狂四郎、この点は木枯し紋次郎と相通じる。狂四郎の場合出生に暗い影がある、だからオンナにはこだわる、聖女を求め続けるのだ。しかし昔の映画はどうしてこんなに奥が深く人物たちも魅力的なのだろう。作り手も洞察力が鋭く会話が生き生きしている。俳優達も本当に人生を背負って演じている。自分の文章。表現力の乏しさにいささか閉口してきた。でも他人の評価を気にすることもない、想いは先生だけにある。ただ私がひたむきに真摯に生きていることが解っていただければいいのです。一生懸命生きる、必死に生きる、こんなことは他人から言われる

ことではない。人は自然に生きるのが一番だ。浪人狂四郎はニヒルだ、彼は言う。おにぎりをこさえてくれた、獄門に架かった海賊の、なにもしらないで今は下女をやっている娘に「おとつあんは、病気で死んだ。生真面目で人から好かれる職人だったよ」。そして委託されたと自ら小判を二枚渡す。狂四郎も笹沢左保が生み出した紋次郎も捨て身だから人の気持ちがよくわかるのだ。狂四郎は決して腕のいい職人とは言わなかった。そんなことより誠実で優しく思いやりがあるほうがきっと大切だと信じていたのであろう。いい家に住む。そんなに必要だろうか。ブランド品、流行におどらされる馬鹿さ加減、この上なにがあるのだろう。二人ともどこかで誰かがきっと待っていてくれるとわずかながらに――

先生へ

山口崇主演の柳生十兵衛をTVで父の生前中やっていた。十兵衛は父但馬守宗矩に片目を傷つけられるのだが、「なんであんなことするが」と父にたずねると「強すぎるからだ」と答えた。私はまだ幼かったがなぜか合点がいった。つまり慢心をいさめたのだと。

清水の次郎長は刀を合わせてみて力を入れてくるやつとは戦うが、こちらに合わせ刃先を自由にする相手に対しては一目散に逃げたそうだ。だから幕末、明治にかけて生き抜いたのであろう。

孫子は言う、己を、知り敵を、知るなら、百戦しても危うきは、知らず。つまり己の弱さ、欠点を知らなければ正確な判断ができず。無残な結果に終わる。

十兵衛はそのままでは命を落とすかもしれない、宗矩の愛情の発露があつたのである。また自分の弱点を知ったものは他人にも優しくなれるものである。

住み込みで小学校の用務員（奥さんが）をしている一家があつた。夫は仕事もせずに朝から酒を飲み、無くなると「酒買ってこい」とどなった。奥さんは先生たちの手前恥ずかしいやら申しわけないやら、人は言った「奥さんが可哀相だ。ろくでなしの親父」。

彼はどう思っていたのであろうか。私が察するに辛いものがあつたと思う。当時といえば学歴、才覚がなければ楽な仕事にはありつけない。傍をみれば大した労働もせず尊敬され高給をもらう教師たち、そんなやつらに安い給金でこきつかわれる女房、住み家さえ与えてやれない自分。その情けなさ、訳のわからない怒りが酒を飲ませ、またそのことが酒に走らせる。変な意地。そうなのだろうな。他人と比較しているあいだは自由ではなく苦悩からは脱せられないのだろうな。人は自分の人生を生きるしかないのだ。偏差値も知能指数も他人が決めた尺度だ。真理は愛と自由にあるのだ。自分の幸福を大事にね。

シェークスピアは劇中で王にも召使い、道化にも人生、思いを語らせる、そしていずれの人生が最良などとは一言もいわない。それぞれが価値あるのである。ホームレスと天皇陛下の命はどちらが重いであろうか。少し考えたが命を重さではかっちはいけないだろう。たまたまこんな世界になっているだけ。金がある、地位がある。たまたまであるこの世は舞台である。

真由子先生へ

仏教に本覚思想というものがある。この世はすべてあるがままで仏の姿の現れであるというものだ。つまり生きとし生けるものはその姿においてもはや仏であると。危険な考え方ではあるが見方においてはあんがい当たっているのである。法華経のなかでは、この世は火宅のごとしみんな逃げるべしといわれている。入々が煩惱をむき出しにするかぎりこの世は餓鬼、畜生、修羅、地獄の世界なのである。しかし一方では仏の所有するありがたい世界とも言っている。矛盾するようだが人々が人生にどう向き合うかで火宅にもなり仏の世界にもなるということなのである。

前にもヘッセのクラインとブァーグナーの話を記したが内なる声、つまり良心に本当にすべてを預けたらあらゆるものの中で、限り無い大きな祝福が待っているのである。だが本当の良心とは如何なるものか。

家族のために雪かきをする灯油を買いに行く。大事なことである。ここで私は筆を擱きたくなる。なぜか母が一言もいわずにおこなってしまう。そして不機嫌になる。昔からである。はっきり言って好きじゃない。そういう人間関係は大嫌いだ。でも良かった。私が精神障害者になって不機嫌になる口実が作れなくなったからだ。勝手になんでもして自縛的に苦しめばよい。そういう人たちのためにもイエスは死んでくれた。兄弟たちは小さな胸、良心を痛めることはないのだと聖書に記されてある。苦しんでいる人は勝手に苦しんでいるのである。苦しむことが好きなのである。

ユニセフ募金の放送を観た。勝手に死んでくれということだろう。親が勝手につくってにおいて責任ひとつ負わない。何ができる。毎月三千円の寄付、えい、まどろっこしいアフリカ税でもつくって金持ちからとりあげろよ。善意の人につけ込むものじゃねえ。

日本の自殺者が減ったそうだが東京では増えているそうだが。オリンピックに相応しい都市へオリンピックってやつが一番、自殺者をふやす基の思想に裏づけられている気がする。つまり勝ち組、負け組と色分ける競争社会である。そしてそこにあるのは金、金、カネ。ぞっとするぜ、まったく。煩惱の溜り場それがオリンピックの正体だ。

母が使うスコップの音を聞きながら思う。あちこち動いて生きるより、静かに座して死ぬ方が仏の世界に近いのかもしれないと、良心とは自由な心である。ちょっと抽象的ですけど解ってください。お願いします。

真由子先生へ

敵とはいかなるものなのか。

たぶん私のことを思ってくれているのであろう。しかしその中に必ず侮辱がはいる、そういう人がある。私の心が狭いのであろうか。聖書は神の心にそうものが兄弟であると説く、しかし言葉は大切だと思う。神経質と片付ける人もいる。だが心は言葉や仕草に表れるものだ。率直で思いやりにあふれた言動は人の心に到達するはずだ。注意深くなく上から目

線はやはり誤解を招くであろう。

ある坊主と二言ほど問答みたいになった。祖母の50回忌の席であった。相手の立場を思いながら意見を吐くのは本当に難しい。まあ人目を気にするということもあるのだが、坊主は真言宗の僧侶で密教、どちらかといえば欲望を積極的に肯定する立場だ。私は孤独死が一番いい死ではないかといった。問題を投げかけたわけだ。民生委員を担っている、坊主は「人の迷惑を考えていない。しがらみがある」といった。私は、そのしがらみを断つためにお釈迦様は出家されたのではないかと返した。「人間がいなくなってもいいのか」ときた。私は人がいなくなることをどこかで容認する人たちもいたと言った。ここで話は中断したが、ここである、はたして全世界の人々が出家して釈尊をめざすということがあるだろうか。それより合いも変わらず欲得に走り名誉に固執する人物が増幅する危険のほうがたいへんな事態だろ。この坊主は勘違いしている、欲望を消すのと制御することを。私の言ったことを小乗ときりすて大乘はことなるお前らは僧にまかせて黙っておれときた。私は言った。大乘は在家から生まれたものと、坊主の面目をつぶしたくはなかったが、悲しくもない、嬉しくもない、いや悲しくもあり、嬉しくもある、酒席での余興にと、思い吹っかけてみた。よく解らなかつたか、いつもなら駄目出しをだす母も、あとで私の説明を聞いて納得してくれた。困らせるつもりはないが、人の悩みを聞くのが坊主の基本姿勢であろう。そんなもんだ。

真由子先生へ

生活保護の問題をとりあげようとしたが国の責任の所在や法律関係がややこしいのでどうしようかと思った。しかし救民対策として国は誠実に対処していかざるをえないのは確かなようだ。

Nさんはアルバイトを半年やったくらいしか勤労体験はない。コミュニケーションのとりにくい人で、自分のこともあまり話さない。前から薬は二粒ほどのむだけの精神障害者で30年近く公的扶助をもらっている。うわさでは大腸ガンの検査を年三回おこなって貧困ビジネスの片棒を担いだりしている。

Yさんの場合薬は飲んでいない、病気でないかもしれない。どうなっているのかわからないが公的扶助、サービスを受けている。二人とも当たり前顔をして生きている。もし国民のみんなが、人間関係がおかしいといって働けない生活保護にしてくれといったらどうなるだろう。これはたぶん杞憂に終わりそうだ。みんなが釈尊をめざすかということと同様の意味あいを持ってくるからである。

彼らについてDさんは言った「しゃあないねけ」長年障害年金をもらっている。働けないのなら仕方がないか、そうだな、だがなぜか引っかかる。みんな自分のことしか考えてないみたいだからだ。その話を床屋のしゅうちゃんにだいぶ前に話した。「とにかく何かせんなん、社会に貢献せんなん」確か生活保護を受けてゴミ拾いのボランティアをしていると自慢していた入がいたなあ。景気の良かったしゅうちゃん。安い床屋が増えたせいで収

入が減り電気料を滞納することもあるという。「生活保護になるわ」そういつていた。私は何が言いたいのだろう。なにかおかしくないか、このままでいいのか。なにも私は小さな親切やボランティアを推進しようというわけではない。

世の中はあくせくする金持ちと怠惰な貧乏人というふうに分けただけでいいのであろうか。両方に深い思想めいたものがあるのであろうか。まあいいか、みんな自由にやってくれただけイエスは各自十字架を背負ってついてこいというし、人のことを考えず神のことを思えともいう。少し思索した。つまり金にまつわる労働と心につながる奉仕そのこの区別を誤ってはならないということなのであろう。

そういえばNさんはいつも歓待してくれたなあ、それも奉仕、彼らは役に立っているのである。生きる意味は見つけるものなのかもしれない。

真由子先生へ

エホバの証人という宗教団体がある。興味があって少し教えを学んでみた。妹が大反対し連日連夜、TELしてきた。

話は単純である。この世は悪魔が支配する社会、われわれが生きいてるうちに神が鉄槌を下し、悪魔は炉にほうり込まれる。団体において規則を遵守するものと、そうして死んだもの（生き返る）だけが助かる。当時私は喫煙の習慣があり、規則を守れない悪人とされた。そういった世の悪人たちはどうなるかという、神は優しいから土に返すだけだと。私はこんな辛気臭い人たちと何千年も生きるのはご免だと事物の体制（悪魔の支配）と共に崩壊します。と土に還ることを選択しました。

そして助かった人たちは衣食住に不自由なく仲良く暮らすそうだ。

話は飛ぶが信長に謁見した宣教師ルイスフロイスは日本人の極楽にたいする思いがあまりにも即物的で彼らが考える神の国との实在概念の違いを肌で感じた」と記している。

このエホバの証人の神の国の即物さはどうであろう。まあ日本以外の国では十分願望をみたすものなのであろうか。

しかし私が思うにはモノがあるない云々よりも他人と比較するところに問題があるような気がしてならない。中国がいい例だ「みんなが貧しかった毛沢東の時代がよかった」という声が聞こえる。よく似ていないか、根本は同じだ。弱者のひがみである。そしてそこにあるのは教育である。教育勅語が天皇への忠誠を植えつけたのと同様、今度はみだりに名を唱えてはいけない。とモーゼの十戒にあるのにエホバ、エホバと神よりもなにか他のものへの忠誠を誓わせようとする。イエスは十字架ではなく丸木にうたれた。だからありがたいなあ。おかしくないか。その前に涙がこぼれるだろう。

自分たちだけのことを考えて差別化をはかり、世の中に認めてもらえない腹いせに手下をつくるため勧誘する。ここも神はみておられる。みずからの心に神の国をうちたてるものをイエスと悪魔は心中にある。選択するのは人間だ。

輸血についてだが「イエスは外から入ったものには汚れない、汚すものは口からでたものだ」と言っている。汚すのはつまりモノではなく言葉なのである。

どうか、みな、私を信じてほしい。主体的に自ら神に祈ってほしい、さすれば狭き門はひらかれる。神は愛である。

真由子先生へ

タカシはいまあるショッピングモールでゴミ収集人の役割を果たしています。彼が小学校2年の校内運動会の際のエピソードです。種目は50だったか100だったか忘れましたがかけっこでした。ヨーイドンの合図と同時に彼は逆方向に走りだしました。見守っていた先生はびっくりしてあわてふためき場内は爆笑のうずと化しました。彼は少し知能が低いとみんなは見ていました。でも彼は誰からも好かれていました。いつも笑みを浮かべ私たちを幸せな気分にさせてくれたからです。だがこのときの彼の表情には悲しみが宿っていました。なぜ逆に走ったのか。私には分かりませんでした。これは推測にすぎませんが彼は辛かったのだと思います。何をやってもビリ、特技もない、そして失笑、今度も白日のもとで恥をかく。私もかけっこは苦手でしたが、競争に対してのなんら疑問など持っていませんでした。タカシは本当にいやだったのです、ひとを比較し優劣をつけることが。今の彼には幼き日の微笑みはもうありません。ただ静かな自信が備わった美しい相をしています。そして寡黙に日々の努めを果たし生活しています。施設にいる弟のもとを訪ねるのがとても楽しみみたいです。彼のような生き方を神仏はきっと一番に愛されるのだと思います。

橋本忍という脚本家がいるが彼と学生とが語り合うフォーラムをテレビで放映していた。学生のひとりが「七人の侍」の中で四人を死なせるのはどういうふうに決まったのですかと尋ねた。橋本先生はあせって自然に決まりましたとなんやら奥歯にものがはさまったような言葉でお茶を濁した。ある新参の映画監督は、われわれはサドであると自慢気に言っていた。私は思うのだが人は必ず死ぬのだからそこにこだわることはないと思うのである。ただドラマツルギーを踏まえその死にゆくようなある意味では損な役割ではあっても鮮やかに人生をコーディネートしてあげることが大切なのではないかと思うのである。私も常々そう考えて文章を仕上げているのである。私の愛するみんなの幸福を祈りながら、それが私のオマージュの捧げ方でもある。

真由子先生へ

中学3年ワルガキだった私に転機が訪れます。私は幼き頃から知っているK子をいじめていました。机を蹴ったり、お笑いのつつこみみたいにからかったり。制服はシワシワ、K子は少し知的障害があるのは明らかでした。周りにいた人間たちもなにも言いませんでした。かばえば「お前好きなんか」と嘲笑の対象になることは分かっていたからでした。K子は舌を出すことも、ときにはありました。でもいつもは黙って苦しい顔をしていました。私は帰宅するといつもなぜか電話が気になりました。なぜだろう。不思議でした。ある晩嫌な予感が的中しました。彼女の父親から娘をいじめて困ると電話があったのです。母の受け答えからはそんなさしせまったことも感じられはしませんでした。

翌日、私はいじめていた何人かにこれからはK子のことをみんなのアイドルと呼ぼうともちかけました。事情を知ったみんなは、異存はないと答えました。私たちには悪気はないと思っていました。芸人がだめならアイドルにしてしまえ、K子に笑顔が戻ってきました。クラスの雰囲気も明るくなり、私もどこか落ち着いてきました。

そんな矢先、K子の父親が痛めて不自由な足を私よりひとつ年上のOが蹴飛ばして、父親が大泣きしたとの情報が入ってきました。Oはかつてつまらぬ揉め事から対峙した私を殴り右の鼻の脇に一生とれない傷を負わせたやつです。彼は別件ですが結果的に同級生に嫌われ袋叩きにされる運命に遭遇します。

時は流れました。K子がポートワインをもとめて来店しました。亡き父のご仏前に捧げるのだと言っていました。K子は堅実な仕事の人といっしょになったそうです。

また時が流れました。彼女の父親が大工仕事の途中で足に大けがをし、3人姉妹と母親の5人で生活保護を受けていたことを知りました。そういえばリヤカーに父親を乗せて引いていたなあ。

私の姪が保育園で叩かれて鼻血をだしたと聞いたとき、私はK子の父親の当時の胸中を想いました。本当は殺したいほど私が憎かったのではないのかと、申しわけない気持ちでいっぱいになりました。涙が嗚咽とともに滴り落ちました。私は、自分は極悪人だと思いました。幸せになる資格さえないと思いました。そんな時手を差し伸べてくれたのは南無妙法蓮華経でありそれにすぎるしか救われる道は私にはなかったのです。

真由子先生へ

罪悪感というものは自ら感じ、愛によってストーブの灯をともしように温かくなり、そして油のように自然に燃え尽きるものである。つまり罪悪感というものは人に押しつけるものではないということだ。なにかの拍子に気づく、メタファ（暗喩）を感じるそんなものではないだろうか。

悪に強いものは善にも強いという。己が悪を感じたからこそ強く善を推し進めることができる。その根底にあるものは一種の罪悪感でなかろうか。だとすれば罪悪感も向上心へとつながるというわけだ。テレビ局が映画を放送するほど寄与しているのである。

罪の意識を感じることは実際に人を殺したり盗んだりするより、一番いいのは聖書を信じ親しみ感じることである。原罪、イエスの受難を胸におさめることである。罪悪感が感謝に変わっていくことであろう。人間ではだれも許しをあたえられるものはいない。神の権威においてのみ可能なのである。

そこから発展させ自己犠牲を売り物にし、布教のためと称して信者を奴隷の立場に仕向ける教団がある。イエスも釈迦もその教えは、やみくもに己の欲得だけに右往左往する衆生に対し強烈なアイロニー（皮肉）を発したのであって、主体性を忘れるな。何ものも精神的な奴隷にはなってははいけないと言っているのである。

ここであえて精神的といったのは古今東西、不幸にも力によって肉体的に奴隷のように扱われている人たちが多くからである。これはやはり政治の力に頼り自然権として人権を訴えていくしかないだろう。南無妙法蓮華経をわすれてはいけない。これは法華経の本当の魂を汲み上げ全宇宙に遍満する久遠の本仏に帰依し感謝し、そして善悪をかみしめることで宮沢賢治も我が父も私も救われたのである。神に許され仏に包まれたのである。

仏道を歩むも神に従うも何十キロの荷物を背負い登山する人と同じで強制すれば虐待となる、ひとりサイの角のように進むのが基本である。そこで傍らの人には原理だけ説いてあげればいいのである。宗教は知識ではない。すすめば深くなりまた答えは開け、そして河を渡れば筏はいらなくなるように永遠の平安が待っているのである。

真由子先生へ

日蓮に匹敵する西洋の宗教改革者にマルチンルターがいる。彼によれば「神と人（信者）を媒介するものは聖書だけであって、教皇や僧侶などがかかわるところではない」しかも。

「神の言葉（聖書）は自己の良心によって解釈されるもので、教会の定めるものによって解釈されるものではない」。また、「人が救われるのは、罪人をも愛する神の愛によってであり、人間の善行によってではない。それゆえ人は信仰によってのみ義とされるのであって、教皇や僧侶によって義とされるのではない」と主張した。

凄いことを言ったものである。いかに教会が腐敗していたかである。そしてやはり思うのは善行というものは人間には規定出来ないということだ。正義は規定できるだろう。だが善であるかどうかは誰にも分からないのだ。心のなかの哀れみ、思いやり、愛、謙虚さなどに基づく信仰心によって義とされ人は神の愛によって救われるのである。

歴史を振り返り神中心の中世は暗い感じがあるがどこか牧歌的な暮らしがあったという。いつか封建的な領主や教会が税、きまりで人々を束縛するようになる。ルネッサンスにより開放的なムードに包まれた。神に姿を変えた悪魔と対峙するようになっていた。権力に脅えながらもルソーは言った「自然にかえれ」そして民主主義は誕生した。みんな今でいえばロックンローラーである。既成の概念を疑うことは神からのミッションを受けた人にとっては苦悩しながらもやりとげなくてはならない大事なことなのである。つまり今も体制に対してもよく見定めてゆかなければならないのだ。もしかしたら神による独裁のほう

が良いかもしれないと、神の国の現出である。

ただいつの時代も世間をどこか意識せず、狂い、馬鹿にした人々は幸福になったみたいだ
なぜかいつも神はそんな人たちのそばにいるからである。

つまり心に愛があるかどうかである。

真由子先生へ

今まで提出した書類の中で矛盾したように誤解されそうなものに遭遇した。救われるのに
善行は関係ないといったくせに、その以前に悪に強いものは善にも強いと善を勧めるよう
なことを記述したことだ。私が言いたかったことは善なるものを求め行動を起こすことは
確かに大切なことだ、しかしそれが本当に善であるかどうかは分からないということだ。
そしてまた小さな親切のような類いのものや売名行為のようなものは神の愛とはなんら関
係ないということだ。誠心をこめる、こちらの報いをもとめない姿勢、それが大きな徳と
なるからである。

今朝の読売にある歯科医のコメントが載っていた。小津安二郎の映画、秋刀魚の味のなか
で駆逐艦の艦長だった男が「戦争に負けてよかった」とつぶやく、半世紀前、不謹慎とも
自虐的とも言われなかったそうだ。当時の大人たちの本音だったらしい。通奏低音だった
と。

私の母は富山空襲で家を焼かれ着のみ着のまま、老いた母親と逃げ回ったそうです。こ
の戦争により母は進学道を断たれました。結婚してからも学校の机を夢にみたそうです。
でもなんのために勉強したいのかが伝わってこないのです。学ぶなら80の手習いでもい
いはずなのに週刊誌のゴシップ記事を読みふけり世の中の情勢をわかった気である。まあ
向学心があるとしておきましょうか。彼女はあの時世界中から援助の物資をたくさん貰っ
た。恩は返さないといけないと言っています。愛とみるか義理とみるか。

話は飛びましたが坂口安吾に墮落論というのがあった。だいたい前に読んだので記憶がうろ
覚えなのだが、日本人は戦争に負けてつまらん精神論を捨て自らの欲望に忠実、つまり正直
になった。墮落したように見えるがこれでよかったんだ。たぶんそういう内容だったと思
う。

行定勲監督の金大中拉致事件の顛末を描いた作品KT。三島の割腹事件に対し花束にて賛
意をしめす自衛官がいた。コメントをもとめる新聞記者を殴ってしまう。そして彼らは再
会する。自衛隊が日の目を見ない現実を嘆く男に記者はいう「天皇の為だとか、共産主義
の為だとか奇麗事はもう沢山だ。狼は死ね、豚は生きろ」そうだな。特定秘密保護法が成
立した。変な名誉欲にとりつかれた馬鹿な野郎たちが威張る時代には逆戻りして欲しくな
いと歯科医は危惧している。私も同感であると言えるであろう。戦争を知らない人に戦争
を始めて欲しくないからである。平和とそれを求めること以外には、知らないという人で
世界中を満たさなければならぬ。真実の愛で以て。母もきっと愛情深い人なのだろうと
思う。

真由子先生へ

しかし日本人というのは本当に真面目である。坂口安吾の墮落論の話を記したが国や企業の圧力の前に自分を主張しただけで個人主義、慎みがないと自ら感じ反省するひとがまだたくさんいるからである。確かに我欲ばかり通す利己的な人間では困るが、全体主義に走るような馬鹿なまねは止めねばなるまい。

吉本隆明が言っている「幼き頃より天皇の臣民と言われてきた、親、兄弟の為には死ねないが天皇のためなら死ねた」と、自分の命と引換になる値あるものとはなんであろうか。そして敗戦。天皇は神格を自ら否定した。人間宣言である。吉本はペテンにあった気がしたという。彼は左翼思想に走り会社の労働運動に傾倒していく。忠勤に励むもの。買収されていくもの。ストライキは頓挫し失敗に終わる。そこで彼は大衆との意識の違いを認識し会社を去るのである。またしても精神の挫折を味わうのだ。

現人神として育てられた昭和天皇の心中にも想いを馳せていたがここでは割愛する。

私が始めて発症したときテレビの画面に明治天皇の写真が何度も映るのである。何故だろうと思っていたが25年後、当時生まれてもいなかった姪が、明治天皇が設立した病院の看護師になっていたのである。だから私はあたら皇室をおろそかにはできないと思うのである。たんなる幻覚と姪の就職先に接点があっただけだと言われれば終いだ、君が代を唄うとき涙が出そうになるのはなぜだろう。皇太子殿下の心情、祈りを思うとき、泣きそうになるのはなぜだろう。金儲けのために世界のどこかで戦争をしかける大国アメリカ。怨念をはらし中華思想の復活を目指す中国。自国だけではなく世界の平和と安寧を祈られる天皇ご一家、かつて日清、日露、昭和戦争に黙って出陣された人々は正義を信じておられた。だから命までかけられたのである。だがもう二度と再現はご免だ。戦争は嫌だ。自由と愛、平等、いろいろな理想があるだろう。心配はいらない。最後は、正義は勝つことを信じよう。自分が踏み台、明日に架ける橋になってゆく覚悟をみんな持てばいいのである。為政者をお願いする。それこそ美しい国が赤い血で汚されないために。

最後は少しわかりにくいかもしれませんが、要は戦争を回避すべく特に政治に携わるものは身を挺して誠を尽くさなければならないということです。

真由子先生へ

ユニセフのことで思い出したが高校生のT君。病室は違ったが彼が退院していく2日前に親しくなった。私がソウ気味で南無妙法蓮華経と大声で唱題するのを恥ずかしくありませんか、どうしてそんなに明るいですかと不思議そうに尋ねてきた。それがきっかけで彼の境遇や悩んでいることを知った。

彼は言った、もし僕が大学へ進学することにより誰かが試験に落ちることを考えるといたたまれない。アフリカでたくさんの子供たちが、飢えや病気や紛争で死んで行くのに何もしてあげられない。そのことを僕はどう捉えていくべきなのか。

私は言った、よく気づいたな、この不条理を。だが彼はきっと整合性のとれた明瞭な答えが欲しかったはずだ。「すべては神仏の計らいのなかにある、例えば試験に受かることが良いことのように思えるが、落ちて予備校に通って彼女ができるかもしれない。一年後他の大学へ入って人生の恩師といえる人に出会うかもしれない。素晴らしい親友が現れるかもしれない。また先に受かった人はとてもいじわるな嫌な先輩に悩まされるかもしれない、なにが良いか悪いかわからないんだ。そしてこれも表面上の欲得でみた限りであって仏様はたえず、いつも速やかに人格が向上するよう働きかけておられるんだ。だからいつでも自らの良心に従い主体的に生きて行けば道はおのずから開けてくる。ただし金儲け、出世には縁がないかもしれない、が確実に幸せにはなれる。負けても、損してもおおらかに自分に対して他人に対してもそう言おう」彼は理解した。

アフリカの子供たち。確かにかわいそうだ。しかし人間は死ぬ。世界中どこでも例外はない早くても遅くても死はやってくるのだ。その点では平等なのだ。公平ではないかもしれないが習俗の違いもあり非人道的と裁くこともできないこともある。我々の価値観を押しつけるわけにはいかないのだ。ただ母親たちに悲しみがあるとするれば、まず彼らの世界に平和を与え母親たちを健康に導かなければならない。募金に応じるのもよかろう、何人かの子供は少しだけ生き延びるだろう。だが根本的な問題は解決されない。それは政治の役割だろうか。

T君に言った。すべては君のためにある、決して自己中心なことではない。みんながそう思えばいいんだ。みんながなにかを自分に教えてくれている。つまり子供たちの死からは隣人を愛することがいかに大事かということを学ぶことができる。そしてどうしてもいたたまれなくなったときは心の中で南無妙法蓮華経と唱えよう。きっとすべてうまくゆくと信じられるから。彼は「すごい、本に書いたら」といったが、大部分はひろ さちや氏の、受け売りだからと私は苦笑した。ちょっとオリジナリティーに欠けたかなと思ったが、応用にしてはT君が喜んでくれてよかったなと思うのである。

真由子先生へ

高校生のT君に対して少し精神訓話になってしまった感があった。つまり道徳的になってしまったと。対機説法としては仕方がなかったか。法華経の十六番には速成就仏身、つまり仏になるためいろいろな現象がおこってくるのだと記されている。私は人格の向上のためと表現した。人格完成とたとえる教団もある。精神分析学者のエーリヒフロムは人格の成熟という言葉をもちいたがそれについてはいずれまた話すことにして。仏の子、神の子これはすべての人がそうなのだ。だから不登校になってしまった学生、怠け者のニート、恋ばかり考えているうわつきものこんな入達がみんなそのままで救われなければならない。彼らは本当に痛烈に世間を批判しているのだ。人の命よりも金のほうが大切、自分さえよければいい、そのくせなにかとのぞき込み否定してくるやつら。人格向上と規定すると単なる聖人君子をめざすような感があるが仏とはそういうものではない。みんなが敵にまわ

るとき、傍らでそっと見守ってくれているのが仏様である。人格向上というのはある意味では不適切だったかもしれない。

金子 みすづ 作
さびしいとき

わたしがさびしいときに
よその人は知らないの

わたしのさびしいときに
お友だちはわらうの

わたしのさびしいときに
お母さんはやさしいの

わたしのさびしいときに
仏様はさびしいの

つまり他人にとってはよそごとであり、友は友でしかない、母親もその心の奥まではわからない、仏様だけがすべてご存じで同悲同苦してくれるのである。そこには人格云々というような理屈めいたものはなくただ、ありがたく。ありがたく南無妙法蓮華経と唱題するだけなのです。南無妙法蓮華経

真由子先生へ

チャールズチャップリンの話です。芸人夫婦の間に生まれ、両親の離婚により幼き日より貧困にあえぎます。アメリカに渡り映画の世界で成功します。ヒトラーを揶揄した独裁者は大ヒットとなります。ところが次回作となった殺人狂時代は不買運動まで起こり閑古鳥がなきます。その中の「一人を殺せば犯罪人だが100万人を殺せば英雄だ」という台詞が問題となったのです。当時世界は冷戦状態でお上に目をつけられたのです。

世の中はTV、芝居、映画、ゲームでは日常的に殺人が行われている。そして実際に人殺しが起きると「信じられない」と糾弾し、国家権力による殺人である死刑まで科すことになる。本物の宗教は絶対生命尊重を訴える。愚かしくも罪を犯した人には懺悔による回心を促し命の救いまでもたらず。人の命って、なんだろう。レマルクの(西部戦線異状なし)という小説の中で憎き敵と殺してみたら死体の胸ポケットから家族の写真が出てきた。同様な人間だった。やはり想像力が大切だろう。当たり前のことだが人はロボットではない。バーチャルとリアルが混同されないように祈るばかりだ。

ライムライトの中でのチャップリンの台詞「生きていくのに必要なものは勇気と想像力とサムマナーだ」は有名だが。若い踊り子はあらゆる面で助けてくれた彼に恩義を感じながらも若いハンサムな作曲家と親密になってゆく。そして彼女は「なにか大切なものをなくしたみたい」とチャップリンに思慕の念を表す。彼は言う「変化しただけさ」なんと優しい言葉だろう、彼女の行く末の幸せを本当に願っているのだ。彼女は気づく彼を愛していると、だが彼もまたそれを理解しているから辛いのだ。彼女は言う「私、おとなになりたいくない」彼は答える「誰でもみんなそう思っている」ピーターパンシンドロームとこれを呼ぶかなあ。そして彼は幸福な死を迎える。舞台の袖で彼女の踊る姿を感じながら。

チャップリンは生前、苦しい人生だったと語っているが、彼が演じたたくさんの放浪紳士たちへの悲しみ、苦しみの共感がどうしても捨て切れなかったのではないだろうか。今の暮らしに感謝の気持ちを持ちながら私は想像するのであるが。

真由子先生へ

今日は私が学生時代に作った詩でもと思ひまして

白紙のページ

愛する人に言葉なくされ

過ぎ行く日々は白紙のページ

青いひたいに募る想いは

忘れられないあの笑顔

バーガーショップは色褪せてゆく

過ぎ行く日々は白紙のページ

うつむきかけた赤い頬に

なぜか耳の裏ほてってしまう

いつかまた会えるだろうか

バイトが終わりふと想う

18の春の終わり頃でした

真由子先生へ

BLUE LETTER

甲斐バンド

とある小さな海岸沿いの町
俺はお前と出会った
ほこりっぽいトラックのクラクション
あせたドライブインの 片隅にお前はいた
恋におち とりこになった
だけど心はなれ いつか別れてきた
ひとときは戯れか返すすべも知らない
さざ波のような傷だけが残った

Blue Letter 涙のつぶで綴ったような
Blue Letter きれぎれの文字が俺を痛めつける

車をとばし港に行ったもんさ
栈橋にもたれ二人海を眺めてた
その年お前をはらませてしまうまで
おだやかに晴れた夏は続いた

車の残骸 たちならぶ浜辺
元気だと書いてよこした便り燃やして
かつて輝いてた 二人だけの浜辺
今はあともなく 深い闇の中
シャツを脱ぎすて 海に入ってゆく
暗くうねる波の 中に俺は入ってゆく
もろかった月日と おとせるはずのない
罪とお前の為に今夜涙を流す

Blue Letter 涙のつぶで綴ったような
Blue Letter きれぎれの文字が俺を痛めつける

美しい調べが心を癒してくれた、ずっと孤独の闇をさまよっていた。
この曲ですくわれたひとは多いだらう

真由子先生へ

妹と姪が尾崎豊のCDを誕生日プレゼントに贈ってくれました。
ベストアルバムの中にいい詞がありました。紹介させて下さい。

ふたつの心

見つめ合うだけの暮らし心の鼓動が
寂しさ塗りつぶし今日を温め合うよ
ふたつの心ふたつの生き方を重ね合うから
君は時々涙を僕はため息をこぼすけど
二人求め合い暮らしてゆけるさ
夜明けまでずっと抱き締め合いながら

そっと扉閉じて僕が旅に行く時
君はいつまでも笑顔を浮かべていた
夜の明かりの向こうで君は僕の帰りを待つ
見知らぬ町の片隅で僕は君の面影抱き締めている
離れて過ごしても君の心が聞こえるよ
君に届くだろう僕のこの思いが

分け合うものなど初めからないけど
心さえあればいつでも二人はあるがまま
そっと強く受け止め合いながら夜が明けるまでずっと
抱き締め合っているよ
二人あるがまま……………

元気でいて下さい

真由子先生へ

こころすれちがう悲しい生き様に
ため息もらしていた
ただこの目に映るこの街でぼくはずっと生きていかなければ
人を傷つけることに目を伏せるけど
優しさをくちにすれば人はみな傷ついていく
僕が僕であるために勝ち続けなきゃいけない
正しいものがなんなのかそれがこの胸に解るまで
僕は街にのまれて少しこころ許しながら、この冷たい街のかぜに
歌い続けている

別れ際にもう一度君に確かめておきたいよ

こんなに愛していた
誰がいけないという訳でもないけど人は皆わがままだ
なれあいのように暮らしても君を傷つけてばかりさ
こんなに君を好きだけど明日さえ教えてやれないから
君が君であるために勝ち続けなきゃならない
正しいものがなんなのかそれがこの胸に解るまで
君は街にのまれて少しこころ許しながら、この冷たい街のかぜに
歌い続けてる

私の好きな尾崎豊の曲です。なにかを乗り越えようとするとき、ああ傷つけられる方が多いなあ私は。でもいままでたくさんの人傷つけてきたもんな。無知もマヒもいけないんだらうな。でもしたたかに、たくましく生きなきゃね。愛をとおすことと生きるために計算だかくなること、つらいなあ、[金がすべてじゃないなんてきれいにはいえない] [今じゃあいつも負け犬よ、銭のせいさ] そんなフレーズが聞こえてきた。

真由子先生へ

尾崎豊

失くした1/2

ひとりぼっちの夜の闇が やがて静かに明けてゆくよ
色褪せそうな自由な夢に 追いたてられてしまう時も
幻の中 答はいつも 朝の風に空しく響き
つらい思いに 愛することの色さえ 忘れてしまいそうだけど
あきらめてしまわないでね

ひとりぼっち感じても
さあ心を開く鍵で
自由描いておくれ

安らかな君の愛に
真実はやがて訪れる
信じてごらん笑顔から すべてははじまるから

ついてない時には 何もかも目をそらすけれど
僕は壊れそうな愛の姿を 君の心に確かめたいだけ
いつまでも見つからぬもの 探すことも必要だけれど
ひとつひとつを暖めながら 解ってゆくことが大切さ
あきらめてしまわないでね
ひとりぼっち感じても
誰もがみな 愛求めて
世界はほら回るよ

安らかな君の愛に
真実はやがて訪れる
信じてごらん笑顔からすべてがはじまるから

あきらめてしまわないでね
ひとりぼっち感じても
さあ心を開く鍵で
自由描いておくれ
安らかな君の愛に
真実はやがて訪れる
信じてごらん笑顔からすべてが
はじまるから

あきらめてしまわないで
真実はやがて訪れる
信じてごらん 笑顔から
すべてがはじまるから

〔深夜3時眠れない。
これからのことを期待して
すこし興奮して眼が冴えている
この曲がながれだした。尾崎に
しては優しく、明るい、感じ
その後、安眠した。
ありがとう、存在するなにかに
対し、私をいざなら、なにかに
対して----〕

真由子先生へ

これも自分の詩です

時の終わりに

夢の中のあなたへ 貝殻の子守歌
聞かせるほどの 器用さはないけど
時の中の一粒の 小石のささやきを
とどけることだけはできそうな気がする
この世に不思議なことがおこる
生まれたことがそうさ
君と手をつなぎ愛しあえることさ
罪と呼ぶにはあまりに楽しすぎることさ
わるいことならば それでもいいのさ
はじめはだれも 見知らぬ旅人さ
気にもとめずに飛び去ってゆく
この世で髪の毛がふれることも
宇宙の中でながめれば本当に本当に不思議なことさ

この世に不思議なことがおこる
生まれたことがそうさ
君と手をつなぎ愛しあえることさ

罪とか悪いとか出てきますが犯罪を起こしたわけではなく、ただ授業をさぼってアルバイトに精をだしていたころの話です

真由子先生へ

なぜか厭世的な若者でした。自作です。

苦しみ

白い白い花のような君に
解るはずない俺の気持ち
つっぱった頭を心に照らし合わせ
うつむいて笑う
人はいつもカッコを気にし
自分自身を忘れてしまう
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

辛い辛い人の世界は
うまくいくこと多からず
ぼっちゃん頭で道を歩いていたら
馬鹿にされてけれ
人はいつも自分よりも
下の者を作ろうとして
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

すんだ事はいいかないけど
グチのひとつもくちをつく
冗談のつもりも本気にとられてしまい
言い訳もそうさ
人はいつも自分の杓子で
他人を計って誤解してゆく
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

女の子達のこころ解らず
いったいだれが好みなの
冷たい態度いるなら、いろよ
そしたらそのまま
人はいつも気があるそぶり
見せたあとで背中向ける
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

白い白い花のような君に
解るはずない俺の気持ち
夢だけ追って足場がなんにもない
上げ底な日々を
人はいつもカッコを気にし
自分自身を忘れてしまう
ああ悲しい、ああ何故
つまずいた夢をもう忘れない

不合理な社会、怠惰な大人たち
虚栄に満ちた女性たち
チキンレースの毎日
本当の勇気とは夢とは
悩んでいた19のとき
作りました

真由子先生へ
自作です

ハピネス

気象不順な日々を暮らし続けた
ある日突然にあなたの吐息のノック
タイマーの音よりもあなたのささやきは
百メガトンの大きさに僕をめざめさせる
あなたの肩があればそれが唯一のハピネス
ハピネス ハピネス ハピネス

あそびなれた奴と思われ続けて
すれた女と思われるあなたが
友達をこえるときあなたの微笑みは
悪魔のそれよりもあやしげなのさ
あなたの熱があればそれが唯一のハピネス
ハピネス ハピネス ハピネス

誰かがいていたあなたと暮らすなど
不幸があなたにとりついていると
ふざけるな僕はどなり気にもしてないよ
本当さうそじゃない一緒にゆこうよ
あなたと死ねるならばそれが唯一のハピネス
ハピネス ハピネス ハピネス
あなたと死ねるならばそれが唯一のハピネス
ハピネス ハピネス ハピネス

少し過激な感じですけど、20位かな、
度胸もないくせに憧れだけは人一倍もって
ました

真由子先生へ
自作です

あの街に帰りたい

希望にてらされて生きていた
昔の二人のビートルズナンバー
つまずきかげんへタな英語
季節に関係ない
僕の声が悲しい春を連れてきたのさ
ボブデュランのうたは大嫌い
いったあの娘はもういないけど
いつかあの街に帰りたいよ
あの街に帰りたいよ
f m f m f m
あの街に帰りたいよ

かならず帰ってくるって
約束したのはワンナイトだった
駅に灯る赤いネオン
あの娘の為だけ
居たんじゃないもとめる夢が見つからなかった
だけど今よりはましだったと
話すあいつが涙にかわる
いつかあの街に帰りたいよ
あの街に帰りたいよ
f m f m f m
あの街に帰りたいよ

この作詞は14の終わり。みんな後一年で
お別れだなどセンチなきもちになったとき
作りました。当時ボブデュランのうたなど
実は知らなくてでも大人になってからも
あまり好きになれなかったなあ

義人